

日中醫學交流

JAPAN - CHINA MEDICAL COMMUNICATION

交流人物／交流人

脳神経外科医 池崎清信医生／脳神経外科医 池崎清信先生

交流活动介绍／交流活動報告（2025年1月～2025年12月）

赴日研修感想／日本研修所感



大阪重粒子線中心/大阪重粒子線センター

2025.

总99期

NPO法人 日中医学交流中心

NPO法人 日中医学交流センター

JAPAN-CHINA MEDICAL COMMUNICATION CENTER



特設公众号 日中医学交流

大阪重粒子線中心

大阪重粒子線中心（地址：大阪府大阪市中央区大手前3-1-10）位于大阪市中心，毗邻大阪城，是一家开展癌症重粒子线治疗的医疗机构，自2018年10月起正式开展治疗服务。



中文网址

重粒子线治疗是一种放射线治疗方法，通过名为“同步加速器（Synchrotron）”的加速装置，将碳离子加速至约为光速的70%，并精确照射至癌灶。重粒子线癌症治疗装置最早由国立研究开发法人量子科学技术研究开发机构（QST）的前身——放射线医学综合研究所，于1993年在世界上首次成功开发。目前在日本国内，包括大阪重粒子线中心在内共有7家机构开展重粒子线癌症治疗。大阪重粒子线中心是日本第6家投入运行的设施，同时也是日本首个由民间主导建设并运营的重粒子线癌症治疗机构。

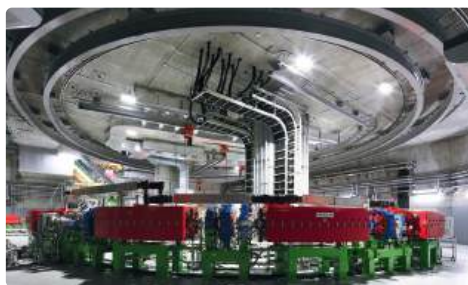
由于重粒子线具有质量较大的粒子特性，与X射线或质子线相比，在人体内具有更优越的剂量分布特性，能够将辐射剂量集中于癌灶，同时减少对周围正常组织的损伤，因此对部分难治性癌症也具有良好的治疗效果。重粒子线治疗的适应癌种和病期有明确的医学标准，是否适合接受该治疗需经专科医师诊断及综合评估后决定。治疗结束后，中心还会与患者的转诊医疗机构保持协作，建立持续的随访与信息反馈机制。

就诊方面，日本国内患者通过医疗机构转诊；海外患者则原则上需通过与大阪重粒子线中心合作的医疗旅游服务机构进行转介与安排。截至2026年3月底，中心已累计治疗来自日本国内及海外的患者病例超过6,300例。此外，中心还接待过来自美国梅奥诊所（Mayo Clinic）、卢森堡、巴拿马、德国、中国、台湾、韩国、新加坡等国家和地区的医疗及政府相关人士前来参观与交流。

在“人生百年时代”到来的背景下，人们不仅关注治疗效果，也越来越重视“生活质量（QOL: Quality of Life）”。中心今后将继续与国内外医疗机构加强合作，作为癌症治疗的重要选择之一持续提供重粒子线治疗服务，并致力于为建设健康长寿社会作出贡献。



治疗室 / 治療室



加速器室（同步加速器）
/ 加速器室（シンクロトロン）



入口大厅 / エントランスホール

大阪重粒子線センター

大阪重粒子線センター（住所：大阪府大阪市中央区大手前3-1-10）は、大阪城に近接する大阪市中心部に位置するがんの重粒子線治療施設で、2018年10月より治療を開始しました。



公式サイト

重粒子線治療は、シンクロトロンと呼ばれる加速器を用いて炭素イオンを光速の約70%まで加速し、がん病巣に狙いを定めて照射する放射線治療法の一つです。重粒子線がん治療装置は、国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構（量研/QST）の前身である放射線医学総合研究所において、1993年に世界で初めて開発に成功した技術です。現在日本国内では当センターを含め国内7か所で重粒子線によるがん治療が行われています。当センターは全国で6番目に稼働した施設であり、民間主導の民設・民営の重粒子線がん治療施設としては国内初の事例です。

重粒子線は粒子が重いため、X線や陽子線に比べ体内の線量分布に優れ、がん病変に線量を集中させ、周囲正常組織への副作用が抑えられ、難治性のがんにも効果が期待できます。適応となるがん種や病期には一定の基準があり、治療の可否は専門医による診察および検討を経て決定され、治療後は紹介元医療機関と連携し、経過報告を行う体制が整えられています。

受診は、日本国内の患者の場合は医療機関からの紹介、海外の患者の場合は当センターと提携する医療ツーリズムエージェントを通じた紹介を基本としています。2026年3月末までに6,300件を超える国内外患者の治療実績を有し、米国のMayo Clinicをはじめ、ルクセンブルク、パナマ、ドイツ、中国、台湾、韓国、シンガポールなどの医療や行政関係者による視察を受け入れています。

人生100年時代を迎え、治療成績のみならず「生活の質（QOL: Quality of Life）」も重視される中、当センターは国内外の医療機関と連携しながら、今後もがん治療の選択肢の一つとして重粒子線治療を提供し、健康長寿社会への貢献も目指してまいります。

目录 / 目次

- 表2** | **封面设施介绍 / 表紙施設紹介**
大阪重粒子线中心 / 大阪重粒子線センター
- 02** | **交流人物 / 交流人**
脑神经外科医生 池崎清信医生 / 脳神経外科医 池崎清信先生
- 04** | **交流活动介绍 / 交流活動報告 (2025年1月~12月)**
- 08** | **赴日研修感想 / 日本研修所感**
- 8 | 龟田综合医院 (泌尿科) / 亀田総合病院 (泌尿器科)
- 10 | 国立癌症研究中心中央医院 (内视镜科) / 国立がん研究センター中央病院 (内視鏡科)
- 11 | 国立癌症研究中心东医院 (胃外科等) / 国立がん研究センター東病院 (胃外科等)
- 12 | 大阪重粒子线中心 / 大阪重粒子線センター
- 14 | 癌研有明医院 (胃外科) / がん研有明病院 (胃外科)
- 16 | 国立癌症研究中心中央医院 (肿瘤内科等) / 国立がん研究センター中央病院 (腫瘍内科等)
- 18** | **日本医学会信息 / 日本医学会情報**
2026年4月~2027年3月 / 2026年4月~2027年3月
- 20** | **会员企业介绍 / 会員企業紹介**
株式会社日立高新技术 / 株式会社日立ハイテク
- 赞助一览 / 協賛団体**
- 17 | 日本米诺发源制药株式会社 / 株式会社ミノファーゲン製薬
- 表3 | EPS益新株式会社 / EPS益新株式会社
- 表4 | EP-Bio Partners株式会社 / EPバイオパートナーズ株式会社

日中医学交流

2025年第1期 (总第99期) 2026年4月30日发行

发行 NPO法人 日中医学交流中心 (<http://www.jcmcc.or.jp>)
邮编 162-0822 东京都新宿区下宫比町2-23 Tsuruya 大厦
TEL: +81-3-6280-8938 FAX: +81-3-6280-8937
咨询 & 联系方式 邮箱: jcmcc01@jcmcc.or.jp



微信公众号
【日中医学交流】

脳神経外科からリハビリテーションへ一次世代の医学交流に懸ける思い

医療法人社団健育会石川島記念病院 院長補佐
池崎清信先生



从神经外科到康复医学 — 寄情于下一代医学交流

医疗法人社団健育会石川島記念病院 院長助理
池崎清信医生

池崎清信医生在作为神经外科医师长期活跃于临床与科研第一线之后，又致力于推动日本康复医学的发展，并积极促进国际医学交流。他的职业历程，始终以“关注患者未来的人生”为出发点，不断探索医疗质量的提升。

可以为我们介绍一下您的职业经历吗？

—我的父亲在福冈县八女市开设内科诊所，母亲是一名护士，因此医生这个职业从小就十分贴近我的生活。我很早就体会到，医疗是一项能够直接陪伴患者人生的工作。看到患者康复后与家属一起表达感谢，我自然而然地感受到，这是一份“能够帮助他人、充满成就感的工作”。高中毕业时，我也曾考虑过成为建筑师或厨师，但想到“只要取得医生资格，将来仍然可以挑战其他梦想”，于是选择了从医之路。1978年毕业于群馬大学医学部后，我曾考虑过在东京工作，但由于我是独生子，父亲当时身体不好，最终选择回到家乡，在九州大学医学部附属医院开始了神经外科医生的职业生涯。1987年我在美国加州大学洛杉矶分校（UCLA），1999年又在美国俄克拉荷马大学医学部担任客座教授，在国际医疗环境中不断吸收最前沿的医学知识与经验。

是什么契机让您立志成为神经外科医生？

—小学时观看的一部美国电视剧《Ben Casey》（注1）对我影响很大。我认为那部剧应该激发了许多人立志学医。真正成为神经外科医生后，我深刻体会到，这是一门“理论、技术与瞬间的判断决定生死”的专业，其严峻性让我感到责任重大，同时也极具魅力。

您为何选择赴美发展？

—从小通过美国电视节目，还有大学时期受到美国西海岸音乐的影响，我对美国一直怀有向往。大学期间，我曾在迈阿密大学参加为期四个月的强化英语课程。在九州大学取得博士学位后，我主动向美国神经外科机构提交申请，最终在UCLA以客座教授身份从事脑肿瘤研究。在那里，我亲自创建研究团队，申请科研经费，并指导住院医师开展研究。这些经验不仅帮助我在回国后更好地支持年轻医生，也为后来参与新医院建设奠定了基础。

听说您与中国结缘的契机，是当时帮助一位曾在日本留学的中国医生前往美国深造？

—是的。在九州大学工作期间，我曾指导来自大连医科大学神经外科的吴春明教授攻读博士学位，帮助当时在山梨医科大学留学的中国医科大学（沈阳）神经外科的刘传会教授联系美国的留学机构，这是我与中国建立联系的最初契机。此后，在国际医疗福祉大学大学院任教期间，我还创建了与韩国仁济大学康复专业学生的交换留学项目，并在日美、日韩相关学会中担任国际委员会委员，持续推动国际交流。

池崎清信先生は、脳神経外科医として臨床・研究の第一線で活躍されたのち、日本におけるリハビリテーションの発展、さらには国際交流の推進にご尽力されてきました。その歩みは、常に「患者さんのその後の人生」を見据えた医療の質の探究でした。

先生のご経歴を教えてください。

—福岡県の八女で内科医院を開業していた父と看護師の母の影響で医師という職業が身近にあり、幼い頃から医療が患者さんの人生に直接寄り添う仕事であることを体感しました。患者さんが回復し、家族と共に感謝の言葉を述べて下さる姿を見て、「人の役に立つ、やりがいのある仕事」だと自然に感じるようになり、高校卒業時には建築家やシェフといった道も考えたのですが、「医師免許を取得すれば、他の夢にも挑戦できる」と考え、医師の道を選択しました。1978年、群馬大学医学部医学科を卒業後東京での勤務を考えていましたが、一人っ子で父が病気となったため、故郷の九州大学医学部附属医院で脳神経外科医の人生をスタートしました。1987年には米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）、1999年にはオクラホマ大学医学部で客員教授を務め、国際的な医療現場に身を置きながら最先端の知見を吸収してきました。

脳神経外科医を志したのはなぜですか？

—小学生の時テレビで放映していた『ベン・ケーシー』（注1）というドラマの影響が大きかったですね。このドラマをみて医師を志した人は多いと思います。実際脳神経外科医となってからは、「理論と自らの技術、そして一瞬の判断が生死を分ける厳しさ」に責任の重さと魅力を感じました。

アメリカに行かれたのは？

—小学生の時に見ていたアメリカTV番組と大学時代にアメリカ西海岸の音楽に魅了され、アメリカに対する憧れがありました。大学時代にマイアミ大学集中英語講座に4か月在籍、九州大学で博士号を取ってから、アメリカの神経外科へアプリケーションを自ら送付し、UCLAで客員教授として脳腫瘍の研究に従事しました。自ら新しく研究室を立ち上げ、研究費の取得やレジデントの研究指導をした経験が、帰国後の後輩へのサポートやその後の新規病院開設に繋がっています。

中国とのご縁も日本に留学していた中国人の先生の米国留学をサポートしたことがきっかけか

—九州大学在籍時に、大連医科大学脳神経外科からの留学生、呉春明教授の博士課程指導と山梨医科大学に留学されていた中国医科大学（瀋陽）脳神経外科の劉伝会教授のアメリカの留学先をお世話したのが中国との最初の接点でした。その後、国際医療福祉大学大学院教授時代に韓国仁済大学リハビリテーション科の大学生との交換留学制度を創設するなど、日米や日韓の学会で国際委員を歴任しながら国際交流に注力しました。

与日中医学交流中心的交流始于2007年前后。当时在JFE钢铁公司任安全卫生部长的好友（已故）高桥信雄先生向我介绍了朴顺子医生，首次访问了当时位于代代木的日中医学交流中心。此后，我邀请朴顺子医生出席了2009年福冈山王医院开院典礼，并多次接待来自中国的政府机构和医疗机构的访问团参观交流，还通过线上形式参加在中国举办的学术会议并进行讲演。

您从神经外科转向康复医学专业，是出于什么考虑呢？

——在神经外科工作中，我逐渐意识到，仅靠手术无法解决所有问题。目睹了很多脑卒中或外伤后的后遗症，往往严重影响患者的日常生活与社会回归的场面。在九州劳灾医院工作期间，我接触到日本于1966年设立的首家康复专业教育机构——九州康复大学及其康复设施。在那里，我亲眼看到曾被认为难以恢复的神经功能得到改善，偏瘫患者能够重新步行出院。再加上对欧美康复机构的考察，使我深刻认识到康复医学的重要性。此后，于2004年在福冈启动“城市型康复”设施（注2）。2009年起，担任福冈山王医院脑神经中心主任及福冈国际医疗福祉学院院长，参与康复临床工作与康复专业人才培养。2013年，年满60岁之际，我以主治医生兼管理者身份参与了在东京新设都市型恢复期康复医院（巨树会）的筹建工作，挑战打造日本康复医疗的全新发展模式。

非常感谢！最后，请谈谈您对今后中日医学交流的寄语。

——日本正在推进以中学校区为单位实现医疗、护理与社会福利一体化的“区域综合照护体系”。由于中国在国土规模、人口和医疗制度等方面与日本存在差异，日本模式难以原样复制。但是，中国新建设施多、设备先进、规模较大，在硬件条件方面甚至优于日本。今后的关键问题，可能在于人才培养体系、医护人员配置的数量与质量，以及应对超高龄社会的制度设计。日本已率先进入以80岁以上高龄人群为主要医疗对象的阶段，在少子老龄化背景下，康复医学的定位与功能正在被重新审视。我希望日中医学交流中心今后能够更加积极地推动两国年轻医务人员之间的交流。我相信，只有超越国家与制度的差异，在深入而持久的相互学习中不断交流与借鉴，才能推动未来医疗事业向更好的方向发展。

注1：《Ben Casey》是20世纪60年代以美国为背景的医疗电视剧，讲述年轻神经外科医生成长的故事，在日本播出后广受欢迎。

注2：城市型康复：传统康复多为郊外长期疗养模式，如温泉地区等。都市型模式通过在短期内集中开展个别化康复训练，为帮助患者尽早恢复，同时提高家属的便利性，在城市中心设立康复机构，使患者在与家人共同生活的环境中进行康复治疗。



池崎医生投身康复医学的起点--九州劳灾医院的诊疗场景
池崎先生がリハビリテーションに関わった原点である九州労災病院にて診察の様子

日中医学交流センターとお付き合いは2007年頃、JFEスチール（株）安全衛生部長をしていた親友の（故）高橋信雄から朴順子先生を紹介され、当時代々木にあった日中医学交流センターを訪ねたのが最初です。その後、2009年福岡山王病院開院式典に朴順子先生にご出席を頂いたり、中国からの公的・私的訪問団の医療施設訪問受け入れと講演、中国で開催された学会等でオンライン講演などをさせて頂いています。

脳神経外科医からリハビリテーションの道に進まれた経緯は？

——脳神経外科医として多くの患者さんと向き合う中、手術だけでは解決できない現実にも直面するようになっていました。脳卒中や外傷後の後遺症が、患者さんとの日常生活や社会復帰に深刻な影響を与える現場を数多く見てきました。九州労災病院在籍時に1966年日本で最初に併設された九州リハビリテーション大学校とリハビリテーション施設で、それまで回復は困難と言われていた神経症状が回復し、片麻痺の患者さんが歩いて帰るのを目のあたりにし、欧米のリハビリテーション施設見学も経て、リハビリテーションの重要性を強く認識しました。その後、2004年福岡市で都市型のリハビリテーション（*注2）を開始、2009年福岡山王病院脳・神経センター長、福岡国際医療福祉学院院长としてリハビリテーションの臨床とリハビリテーションスタッフの養成に参画、60歳を迎えた2013年には、日本で広がりを見せつつあった都市型回復期リハビリテーション病院の東京での新規開設（巨樹の会）に主治医・管理者として参画し、日本のリハビリテーション医療の新たな形づくりに挑戦しています。

ありがとうございました。最後に今後中国との医学交流に期待することは？

——日本は中学校区の範囲で医療や介護・福祉が完結する地域包括ケアシステムを確立中で、中国とは国の大きさや人口・医療制度が異なるので、日本のシステムをそのまま導入するのは困難でしょう。ただ新設の施設や最新設備が多く規模も大きいので、物理的環境は日本以上に整っていると思います。今後は人材育成の仕組みや患者さんに対する医療スタッフの人数と質、超高齢社会に対応する制度設計が課題となるのではないのでしょうか。中国に先駆けて80歳以上の超高齢者を対象とした医療が中心となりつつあり、少子高齢化社会におけるリハビリテーションの在り方そのものが問われています。日中医学交流センターでは、これから両国の医療を担っていく若い医療従事者同士の交流を、ぜひ積極的に進めてほしいと思います。国や制度の違いを超え、深く長く互いに学び合う経験こそが、未来の医療をより良いものにすると思っています。

*注1：ベン・ケーシーは1960年代のアメリカを舞台に若き神経外科医のベン・ケーシーが成長していく医療ドラマ。日本でも放送され大人気を博した。

*注2：都市型リハビリテーション：従来型（郊外型）リハビリテーションとは温泉地等の地方でゆっくりリハビリテーションに励む長期滞在型のものであった。都市型は個別訓練を集中的に短期間実施し、患者さんの早期回復と家族の利便性向上のため、都市中央部にリハビリテーション施設をオープンし、家族と生活を共にしながらリハビリテーションに励むスタイル。



2015年、应大连医科大学吴教授邀请访问大连。首次访问中国。
2015年に大連医科大学の呉先生に招待され大連へ。初の中国訪問。

1 为加深对日本医院护士业务及护理管理的理解，2025年6月以来，来自中国国内的5个护理团来日，走访了多家医疗机构并进行了深入交流。

该系列护理团，先后访问了龟田综合医院、原宿康复医院、东京都健康长寿医疗中心、杏林大学医学部附属医院、东海大学医学部附属八王子医院、东京大学医学部附属医院、兵库县立尼崎综合医疗中心、大阪国际癌症中心、京都冈本纪念医院并进行交流学习。护理访日团深入了解了扎根临床一线的护理实践，通过实地参访，进一步加深了对日本护士业务与护理管理现状，人才培养与护理质量管理体系的理解，同时也加深了对日本老龄化背景下老年医疗与康复医疗现状的认识，获得了诸多启示。

今后，本中心也将以该系列交流为契机，继续加强与支持在医疗领域中发挥重要作用的护理专业的中日交流与合作。



参访龟田综合医院
亀田総合病院を訪問



参访东京都健康长寿医疗中心
東京都健康長寿医療センターを訪問



参访杏林大学医学部附属医院
杏林大学医学部附属病院を訪問



参访东京大学医学部附属医院
東京大学医学部附属病院を訪問



参访原宿康复医院 (上排从左起第1~3张)
原宿リハビリテーション病院を訪問 (上段左より第1~第3枚)



参访东海大学医学部附属八王子医院
東海大学医学部附属八王子病院を訪問



参访大阪国际癌症中心
大阪国際がんセンターを訪問



参访兵库县立尼崎综合医疗中心 (上排从左起第2~3张)
兵庫県立尼崎総合医療センターを訪問 (上段左より第2~第3枚)



参访京都冈本纪念医院
京都岡本記念病院を訪問

日本の病院における看護業務および看護管理への理解を深めることを目的として、2025年6月以降、中国各地から計5つの看護訪日団が来日し、複数の医療機関を訪問して交流を行いました。

看護訪日団は、亀田総合病院、原宿リハビリテーション病院、東京都健康長寿医療センター、杏林大学医学部附属病院、東海大学医学部附属八王子病院、東京大学医学部附属病院、兵庫県立尼崎総合医療センター、大阪国際がんセンター、京都岡本記念病院を訪問し、交流・研修を行いました。看護訪日団は、臨床現場に根ざした看護実践について理解を深め、非常に実り多く、意義深い学びの機会を得ました。実地見学を通じて、日本における看護業務および看護管理の現状、人材育成や看護の質管理体制への理解がさらに深まりました。また、日本の高齢化社会を背景とした高齢者医療およびリハビリテーション医療の現状についても理解を深め、多くの示唆を得ることができました。

今後、本センターでは本シリーズの交流を契機として、医療分野において重要な役割を担う看護専門職の日中交流および協力のさらなる推進に努めてまいります。

概要：2025年1月～12月、本中心开展中日互访交流与线上交流相结合，共实施了8场云端交流会，17次访日团，5名进修医生，邀请3位日本专家访中交流，受益人数共计超6万人次。

概要：2025年1月～12月、オンライン交流と日中訪問交流と並行し、オンライン交流会8回、訪日団17団体、研修医5名、訪中講演3名で、参加者数が延べ6万名以上でした。

2 江苏省淮安市第一人民医院机器人辅助手术交流团访日交流／江蘇省淮安市第一人民医院よりロボット手術交流団が来日

2025年6月、来自江苏省淮安市第一人民医院（南京医科大学附属淮安第一医院）的两位医生来日访问，旨在深入了解日本医疗机构在机器人辅助手术的应用及其运营管理体系。访日一行先后参访了东京慈惠会医科大学附属医院、东京科学大学医院、国立癌症研究中心中央医院，并与日本专家进行了深入交流。

在东京慈惠会医科大学附属医院的参观与交流

在东京慈惠会医科大学附属医院，交流会开始前，访日一行参观了泌尿外科、外科的机器人手术以及妇产科手术。在随后的交流会上，妇产科主任教授冈本爱光先生首先致欢迎词，接着由同科的小田嶋俊医生以《妇科领域实际机器人辅助手术视频及教育现状》为题进行讲演。中方医生也分享了医院引进机器人辅助手术机器第二年的运用情况及所面临的课题，双方进行了积极的讨论与交流。

在东京科学大学医院的讲演与交流

在东京科学大学医院，消化外科学教授、肛门外科主任兼微创治疗中心主任絹笠祐介医生作了题为《东京科学大学医院的机器人治疗实况与运营管理》的讲演。讲演不仅介绍了该院在机器人手术方面的实际经验，也详细介绍了日本国内机器人辅助手术导入的指导方针变迁，随后双方展开了深入的交流。

在国立癌症研究中心中央医院的讲演与讨论

在国立癌症研究中心中央医院，泌尿科・后腹膜肿瘤科主任松井喜之医生作了《泌尿科领域的机器人辅助手术》讲演，胃外科医长林勉医生则介绍了《国立癌症研究中心的机器人胃切除》。讲演后，双方展开了热烈讨论，围绕具体病例与手术技术等问题进行了专业层面的深入交流。

通过实地交流加深理解与合作期待

中方医生在交流结束后表示：“对于机器人辅助手术的临床应用有了更深入的理解，收获颇丰。”同时也表达了希望今后能邀请日本专家赴华指导的意愿，对今后的进一步交流充满期待。本次交流活动不仅加深了中日两国专家之间的相互理解，也为未来在机器人手术领域的技术合作与人员交流奠定了良好基础，令人充满期待。



于东京慈惠会医科大学附属医院冈本教授办公室合影/
东京慈惠会医科大学病院 岡本先生の教授室にて



小田嶋医生讲演现场/
小田嶋先生 ご講演の様子



与冈本教授、竹中医生、小田嶋医生合影留念/
岡本先生、竹中先生、小田嶋先生との記念撮影



于东京科学大学医院交流现场/
東京科学大学病院にて交流中



向絹笠教授赠送纪念品/
絹笠先生へ記念品を贈呈



与絹笠教授合影留念/
絹笠先生との記念撮影



于国立癌症研究中心中央医院交流现场/
国立がん研究センター中央病院にて交流中



与林医生、松井医生合影/
絹林先生・松井先生との記念撮影



在国立癌症研究中心中央医院纪念合影/
国立がん研究センター中央病院にて記念撮影

左：陶医生(2016年)、
右：高医生(2017年)
曾在该院研修
/
左：陶先生(2016年)、
右：高先生(2017年)に
同院で研修歴あり

2025年6月、江蘇省淮安市第一人民医院（南京医科大学附属淮安第一医院）から医師2名が来日し、日本の医療機関におけるダ・ヴィンチロボット支援手術の活用および運営管理体制について理解を深めることを目的に、東京慈惠会医科大学附属病院、東京科学大学病院、国立がん研究センター中央病院の3施設を訪問し、日本の専門家と交流を行いました。

東京慈惠会医科大学附属病院での見学と交流会

東京慈惠会医科大学附属病院では、交流会に先立ち、泌尿器科、外科におけるロボット支援手術および婦人科手術の見学が行われました。交流会では、産婦人科主任教授・岡本愛光先生より歓迎のご挨拶をいただいた後、同産婦人科の小田嶋俊先生より「婦人科における実際のロボット手術映像と教育の現状」についてご講演がありました。これに対して中国側医師からは、ダ・ヴィンチ導入2年目の運用状況や直面している課題について紹介がなされ、積極的な質疑応答と意見交換が行われました。

東京科学大学病院での講演と意見交換

東京科学大学病院では、消化管外科学分野教授であり、大腸肛門外科科長、低侵襲医療センター長を務める絹笠祐介先生より、「東京科学大学におけるロボット治療の実際と运营管理」についてご講演いただきました。講演では、同院での取り組みに加え、日本国内におけるロボット手術導入ガイドラインの変遷についても詳しくご説明いただき、その後、意見交換が行われました。

国立がん研究センター中央病院での講演と議論

国立がん研究センター中央病院では、泌尿器・後腹膜腫瘍科科長の松井喜之先生より「泌尿器領域におけるロボット支援手術」、胃外科医長の林勉先生より「国立がん研究センターにおけるロボット胃切除」についてご講演いただきました。講演後には活発なディスカッションが行われ、具体的な症例や手術技術などに関して専門的な意見が交わされました。

実践的な交流を通じて深まった理解と期待

交流を終えた中国側の医師からは、「ダ・ヴィンチロボットの臨床応用についてより深く理解でき、大変参考になった」との感想が寄せられました。また、「機会があれば、日本の専門家を中国にお招きし、現地地のご指導を仰ぎたい」との希望も表明され、今後のさらなる交流への期待が寄せられました。本交流を契機に、日中両国の専門家間の相互理解が一層深まり、ロボット手術分野における技術協力や人的交流のさらなる発展が期待されます。

3

为促进中日药剂师领域的交流与合作，推动医院药剂学科建设与发展，中国药学专家一行于10月赴日本进行访问交流，先后考察了兵库县立尼崎综合医疗中心、杏林大学医学部附属医院、东京大学医学部附属医院，参观各院药剂部门，并与日方专家围绕相关专业内容进行了充分交流与探讨。



参访兵库县立尼崎综合医疗中心
兵庫県立尼崎総合医療センターを訪問



参访杏林大学附属医院
杏林大学医学部附属病院を訪問



参访东京大学医学部附属医院
東京大学医学部附属病院を訪問

日中両国の薬剤師分野における交流と協力を促進し、病院薬剤学の学科建設および発展を推進するため、中国の薬学専門家一行は10月に日本を訪問し、交流を行いました。訪日期間中、兵庫県立尼崎総合医療センター、杏林大学医学部附属病院、東京大学医学部附属病院を順次視察し、各病院の薬剤部門を見学するとともに、関連分野について日本側の専門家と十分な意見交換および討議を行いました。

访中交流 / 訪中交流

1

2025年4月、名古屋大学医学部附属医院 消化・肿瘤外科教授江畑智希先生访问中国，出席在成都举办的一带一路国家肝脏微创技术国际培训班暨2025中国肝胆胰创新大会。在大会期间，江畑教授进行了手术直播演示。

在手术直播中，针对一例Bismuth I型肝门部胆管癌患者，在既往实施胆管切除及胆管空肠吻合术后，因吻合口局部复发，行肝右叶切除、尾状叶切除及胆管切除。术中在初次肝侧胆管切缘发现异型细胞，遂追加切除胆管，最终切缘转为阴性。在本次访中交流中，本中心对相关协调工作提供了部分支持。



互动 直播介绍 专家介绍 病例介绍 其他直播间 返回分会场

江畑智希教授 手术直播中 / 江畑智希教授 手術ライブ

2025年4月、名古屋大学医学部附属病院 消化器・腫瘍外科教授の江畑智希先生が中国を訪問し、成都で開催された「一带一路」国家肝臓低侵襲技術国際研修会ならびに2025中国肝胆胰イノベーション大会に出席されました。同会において、手術ライブが行われました。

Bismuth I型肝門部胆管癌に対して胆管切除・胆管空腸吻合を行った症例における、術後吻合部局所再発に対して肝右葉切除・尾状葉・胆管切除を行いました。初回の肝側胆管断端に異型細胞を認めたため、胆管を追加切除し陰性となりました。

本訪問にあたり、当センターにおいて一部調整等の支援を行いました。

辛e訊学术直播是免费的线上直播学术交流平台，旨在通过活用专业资源，向中国各地医师及相关从业者传播前沿医学学术成果与诊疗经验。该活动观众覆盖中国30余个省级行政区，官方账号注册人数近1.5万人。自2020年6月开始直播以来，截至2025年12月已累计举办72期。在第45期直播中首次邀请海外专家担任讲师并获得热烈反响，由此开始定期与日本妇产科专家开展直播交流。

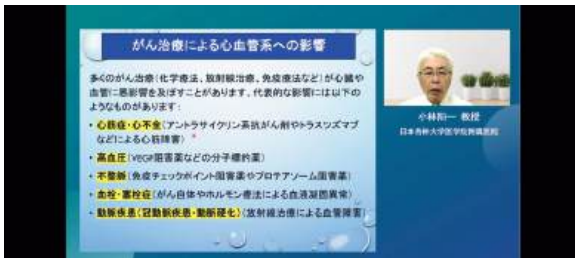
辛e訊学术ライブは、プラットフォームの専門リソースを活用して、高度な医学学术や診療経験を中国各地の医師・関係者に広めることを目的とした無料ライブ配信学术交流活動です。視聴者は中国全土30以上の省にわたり、公式アカウント登録者は約1.5万名です。2020年6月から講義ライブ配信開始以来、2025年12月までに合計72回開催されました。第45回では初めて海外の専門医を講師としてお招きし、講義が大変ご好評を頂いたことから、来月は日本専門医との定期的な開催が決定されました。

4 7月、邀请日本鹿儿岛大学医学院专家，就《我所尝试的妇科机器人手术式的开发》作相关主题演讲和交流。
7月、鹿児島大学病院の先生をお招き、「私が試みてきた婦人科ロボット新規術式の開発」について講演・交流を行いました。



小林裕明教授作演讲 / 小林裕明教授によるご講演

1 3月、邀请日本杏林大学医学部附属医院专家，就《妇科癌症中肿瘤心脏病学的重要性》作相关主题演讲和交流。
3月、杏林大学医学部附属病院の先生をお招き、「婦人科がんにおける腫瘍循環器学的重要性」について講演・交流を行いました。



小林陽一主任教授作演讲 / 小林陽一主任教授によるご講演

5 8月、邀请日本大阪大学医学部附属医院专家，就《卵巢癌微创手术的现状》作相关主题演讲和交流。
8月、大阪大学医学部附属病院の先生をお招き、「卵巢癌に対する低侵襲手術の現状」について講演・交流を行いました。



小玉美智子教授作演讲 / 小玉美智子教授によるご講演

2 5月、邀请日本赤坂山王医疗中心专家，就《日本宫颈癌筛查的现状》作相关主题演讲和交流。
5月、赤坂山王メディカルセンターの先生をお招き、「日本における子宮頸がん検診の現状」について講演・交流を行いました。



青木大輔院長作演讲 / 青木大輔院長によるご講演

6 9月、邀请日本大学医学部附属板桥医院专家，就《HPV感染与宫颈癌免疫疗法的发展与未来》作相关主题演讲和交流。
9月、日本大学医学部附属板橋病院の先生をお招き、「HPV感染と子宮頸がんに対する免疫療法の発展と将来」について講演・交流を行いました。



川名敬教授作演讲 / 川名敬教授によるご講演

3 6月、邀请日本国立癌症研究中心东医院专家，就《晚期卵巢癌广泛性壁层腹膜切除术（TPP）》作相关主题演讲和交流。
6月、国立がん研究センター東病院の先生をお招き、「進行卵巢癌への壁側腹膜切除術」について講演・交流を行いました。



田部宏科長作演讲 / 田部宏科長によるご講演

7 12月、邀请日本京都大学医学部附属医院专家，就《AI开创妇科肿瘤学新进展：AI在病理学、影像学及手术视频中的应用》作相关主题演讲和交流。
12月、京都大学医学部附属病院の先生をお招き、「AIで切り開く婦人科腫瘍学の新たな展開～病理、画像、手術動画にAIを活用する～」について講演・交流を行いました。



村上隆介先生作演讲 / 村上隆介先生によるご講演

龟田综合医院研修感想

何 宁

浙江大学医学院附属第一医院 泌尿外科

回望在龟田综合医院这三个月的时光，从初入科室时对日语医疗术语的生涩，到能够独立参与手术配合、与团队流畅沟通，这段经历不仅是专业技能的跃升，更让我对“以患者为中心”的医疗理念有了全新的认知。而这一切成长的起点，都离不开泌尿外科安倍弘和主任（图1）的悉心指导，尤其是在他深耕多年的女性泌尿外科领域，那些精准微创的手术操作，至今仍清晰地印在我的脑海中——其中许多画面，都与龟田医院手术室的那面时钟、4K腹腔镜显示屏紧密相连。

龟田综合医院作为日本关东地区颇具影响力的综合性医院，其泌尿外科以“细分领域精尖化、诊疗流程人性化”闻名。初到科室的第一天，安倍弘和主任使用温和却坚定的语气告诉我：“泌尿外科不是‘男性专属科室’，女性泌尿系统疾病的诊疗需求往往被忽视，却更需要细腻的技术和共情的态度。”这句话如同一把钥匙，打开了我对女性泌尿外科领域的探索之门。在此之前，我在国内临床中接触的女性尿失禁、盆腔脏器脱垂等病例，多以经阴术式为主，此次学习加深了我对腹腔镜下骶骨固定术（LSC）、经阴道植入网片术（TVM）等微创技术的认知。我多次与安倍弘和主任并肩站在手术台前——他戴着绿色无菌手套，眼神透过镜片聚焦在手术区域，而我站在侧旁，紧张又期待地准备配合LSC手术，让我真切感受到了微创技术对患者的意义。



图1 与泌尿外科安倍弘和主任的术中合影

图1 泌尿外科部长である安倍弘和先生との術中写真

图2 LSC术中图片

图2 LSC術中写真

那是一位52岁的子宫切除术后盆腔脏器脱垂患者，术前评估显示其阴道顶端脱垂达Ⅲ度，合并压力性尿失禁。手术开始后，手术台旁的4K腹腔镜显示屏（图2）将盆腔内的组织层次清晰地呈现在眼前：安倍主任手持器械分离腹膜，屏幕里的血管丛如细密的网络般展开，他的每一次操作都精准避开血管，补片缝合时的针线角度在高清画面下毫无偏差。他在手术中始终关注患者的体位舒适度和术后恢复需求，特意调整了腹腔镜Trocar的穿刺位置，减少对腹部肌肉的损伤，“这样患者术后第二天就能下床活动，住院时间能缩短2-3天”，他一边操作一边向我解释。这场手术的画面，屏幕中补片与骶前筋膜的贴合度、缝合的张力控制，都是女性泌尿外科手术“精细化”的最佳体现。术后查房时，患者握着安倍主任的手说“没想到这么大的手术，醒来后一点都不疼”，那一刻我忽然明白，真正的顶尖技术，不仅是“治好病”，更是“让患者少受苦”。

如果说LSC手术展现的是安倍主任在复杂手术中的全局把控力，那么TVM手术则让我看到了他对“微创”理念的极致践行。记得有一位48岁的压力性尿失禁患者，因频繁漏尿不敢出门社交，甚至出现了焦虑情绪。安倍主任在术前评估时，不仅详细询

龟田综合病院研修所感



何 寧

浙江大学医学院附属第一医院 泌尿器科

龟田综合病院での三か月間の研修を振り返ると、最初は日本語の医療用語に戸惑いながらも、次第に助手の一人として手術サポートに参加し、チームと円滑にコミュニケーションを取れるようになりました。この経験は専門技術の飛躍的な向上に加え、「患者中心の医療」という理念への新たな理解を深める貴重な機会となりました。このような成長ができたのは、泌尿器科部長である安倍弘和先生（図1）の丁寧な指導なしにはあり得ません。特に、安倍先生が長年にわたり研鑽を積み重ねてきた女性泌尿器科領域における精緻で低侵襲な手術技術は、今でも鮮明に記憶に残っています。亀田総合病院の手術室の時計や4K腹腔鏡モニターの映像とともに、その光景が今でも鮮明に蘇ります。

亀田総合病院は関東地方でも有数の総合病院であり、その泌尿器科は「各分野の高度専門化と患者に寄り添った診療プロセス」で広く知られています。初日に、安倍先生が語られた「泌尿器科は「男性のためだけの科」ではありません。女性泌尿器疾患こそ、繊細な技術と共感の姿勢が求められるのです。」という言葉は、私の女性泌尿器科への探求の扉を開いてくれました。これまで中国での臨床では、女性尿失禁や骨盤臓器脱に対して主に経腔的アプローチを行ってききましたが、今回の研修では、腹腔鏡下仙骨固定術（LSC）や経腔メッシュ手術（TVM）などの低侵襲手術の理解を深めることができました。安倍先生とともに何度も手術台に立ち——安倍先生は緑色の滅菌手袋を着け、レンズ越しに手術野へ鋭く視線を集中させておられました。その傍らで、私は緊張と期待が入り混じった気持ちでLSC手術に合わせて準備を進めながら、低侵襲手術が患者さんにとってどれほど大きな意味を持つのかを、肌で感じることができました。

それは、52歳の子宮摘出術後に骨盤臓器脱を呈した患者さんでした。術前評価では腔断端脱がⅢ度に達し、腹圧性尿失禁も併発していました。手術が始まると、手術台横の4K腹腔鏡モニター（図2）には、骨盤内の組織層が鮮明に映し出されました。安倍先生が器具を操作して腹膜を剥離していくと、画面上に血管叢が細かなネットワークのように広がり、先生のひとつひとつの操作は血管を的確に避けながら進められていました。メッシュ縫着時も、針の刺入角度や走行は高精細映像下でも全くぶれがなく、その精度の高さに感銘を受けました。さらに安倍先生は、患者の体位の快適性や術後回復への配慮を常に念頭に置き、腹腔鏡のトロッカー（Trocar）穿刺位置を工夫して腹壁筋群への侵襲を最小限に抑えていました。「こうすると、術後翌日には歩き始められ、入院期間も2～3日短縮できます」と、操作を続けながら丁寧に説明していただきました。モニターに映るメッシュと仙骨前筋膜との密着度、縫合の張力コントロール——そのひとつが、女性泌尿器科手術における“精緻さ”をよく示していました。術後の回診では、患者さんが安倍先生の手を握りながら、「こんなに大きな手術なのに、目が覚めたら全然痛くなくて驚きました」と感謝を述べました。その瞬間、私はふと気づきました。本当に卓越した技術とは、単に“病気を治すこと”だけではなく、“患者さんができる限り苦しまずに回復できるようにすること”なのだ。

LSC手術が安倍先生の全体的なマネジメント力を示すものであるとすれば、TVM手術は「低侵襲理念の究極の体現」だと感じました。ある48歳の腹圧性尿失禁患者が頻繁な尿漏れのため外出や人付き合いを控え、不安感も生じていました。安倍先生は術前評価で、患者さんの尿漏れの頻度や生活上の困りごとを詳しく聞くだけでなく、更にはリハビリスタッフも交えて、「手術＋術後骨盤底筋トレーニング」という個別の計画を立ててくれました。手術当日、操作はわずか30分で完了しました。陰道前壁の小切開からメッシュの挿入、張力調整、固定縫合ま

问了患者的漏尿频率、生活困扰，还特意让康复师一同参与，制定了“手术+术后盆底肌训练”的个性化方案。手术当天，整个操作仅用了30分钟——从阴道前壁小切口置入补片，到调整补片张力、固定缝合，每一个步骤都简洁高效，却又充满细节考量。“TVM手术的关键不是‘快’，而是‘准’”，安倍主任在手术结束后对我说，“补片的位置差1毫米，可能就会影响术后效果，甚至导致排尿困难。”术后一周，患者复查时笑着说“现在终于能正常和朋友逛街了”，这样的场景，让我深刻体会到女性泌尿外科手术不仅治疗身体疾病，更在修复患者的生活信心。

除了女性泌尿外科这一特色领域，在安倍主任的安排下，我还系统学习了泌尿外科肿瘤、结石等常见病的规范化诊疗流程。第三张图里的腹腔镜画面，记录的正是一台肾部分切除术的操作过程（图3）：屏幕中肾周脂肪与筋膜的分离界面清晰可见，安倍主任团队对“保留神经血管束”的操作，让我直观理解了“肿瘤根治与功能保护平衡”的理念。还有印象最深的是一位72岁的局部晚期前列腺癌患者，影像学显示肿瘤侵犯精囊，安倍主任团队并没有直接选择根治性手术，而是先进行了3个月的新辅助内分泌治疗，待肿瘤缩小后再行腹腔镜下前列腺癌根治术，术后患者的尿控功能恢复良好，PSA（前列腺特异性抗原）降至0.01ng/ml以下。这种“不急于手术，先为患者争取最佳预后”的诊疗思路，让我对肿瘤治疗的“整体性”有了更深刻的理解。



图3 肾部分切除术中图片
图3 肾部分切除术中写真



图4 泌尿结石手术
图4 尿路结石手術

在泌尿系结石的诊疗领域，龟田医院的“微创化、精准化”理念同样值得借鉴。这里的输尿管软镜碎石术已实现“日间手术”常态化，大部分患者当天手术、次日即可出院。我曾参与过一台复杂的鹿角形肾结石手术，患者的结石直径达4.5cm，且合并肾积水。安倍主任团队采用“输尿管软镜联合经皮肾镜”的双镜联合技术，先通过经皮肾镜清除大部分结石，再用输尿管软镜处理肾下盏的残余小结石，全程仅用2小时，术后复查KUB（腹部平片）显示结石清除率达100%（图4）。手术中，安倍主任反复强调“保护肾功能是第一位的”，他通过调整灌注液压力、控制手术时间，最大限度减少了对肾实质的损伤。这种“以器官保护为核心”的手术理念，也成为我后续临床工作中重要的准则。

三个月的进修时光，除了技术层面的收获，更让我触动的是龟田医院团队的“协作精神”与“人文关怀”——手术室墙面的操作指引标识、器械台的规范摆放，都体现着这里“流程化与人性化并存”的医疗氛围。

离别之际，安倍弘和主任送给我一本他编写的《新女性泌尿外科手册》，扉页上写着“医学无止境，共情是初心”。这句话，成为我此次进修最大的收获——那些手术室里的画面、4K屏幕上的操作细节，不仅是进修生活的记录，更成了我后续临床工作中对照学习的“范本”。回到国内后，我计划将在龟田医院学到的LSC、TVM等技术逐步应用于临床，并借鉴其人文关怀理念，为国内的女性泌尿外科患者提供更优质的诊疗服务。我知道，这段赴日进修的经历，不是终点，而是我作为泌尿外科医生不断求索、持续成长的新起点。未来，我将带着这份收获与感悟，在守护患者健康的道路上，继续前行。

で、すべてが簡潔で効率的でありながら、細部にまで配慮が行き届いていました。「TVM手術のポイントは“速さ”ではなく“正確さ”です」、「メッシュの位置が1ミリでもずれると、術後の結果に影響し、排尿障害を招くことさえあります」と、安倍先生は手術後に私に教えてくれました。1週間後、患者さんは笑顔で「これでようやく友人と普通に買い物に行けます」と話してくれました。この場面を目の当たりにし、私は女性泌尿器科手術が単に身体の病気を治すだけでなく、患者さんの生活への自信も取り戻す医療であると改めて深く実感しました。

女性泌尿器科という特色ある分野に加え、安倍先生のご配慮により、泌尿器科腫瘍や結石などの一般的疾患についても、体系的に標準化された診療プロセスを学ぶことができました。図3に示されている腹腔鏡画面は、腎部分切除術の操作過程を記録したものです。画面上では腎周脂肪と筋膜の分離界面が非常に明瞭に確認でき、安倍先生のチームによる「神経血管束の温存」を意識した操作を通して、私は「腫瘍根治と機能温存のバランス」という理念を直感的に理解することができました。特に印象に残っているのは、72歳の局所進行前立腺癌の患者さんです。画像診断では腫瘍が精囊に浸潤していましたが、安倍先生のチームはすぐに根治手術を行うのではなく、まず3か月間の新補助内分泌療法を行い、腫瘍が縮小してから腹腔鏡下根治的前立腺全摘除術を実施しました。術後、患者さんの尿失禁は良好に回復し、PSA（前立腺特異抗原）は0.01ng/ml以下まで低下しました。このように「手術を急がず、患者さんにとって最良の予後をまず考える」という診療方針を間近で学び、腫瘍治療における「全体性」の重要性をより深く理解することができました。

泌尿器結石の診療分野においても、亀田総合病院の「低侵襲・精密化」という取り組みは大いに参考になりました。ここでは、軟性尿管鏡による碎石術が「日帰り手術」として定着しており、多くの患者さんが手術翌日には退院可能です。私は複雑なサンゴ状結石の手術に参加する機会がありました。患者さんの結石は直径4.5cmに達し、さらに水腎症を合併していました。安倍先生のチームは「軟性尿管鏡と経皮的腎鏡の併用技術」を用い、まず経皮的腎鏡で大部分の結石を除去し、その後軟性尿管鏡で下腎杯の残存した小結石を処理しました。手術全体の所要時間はわずか2時間で、術後再検査のKUB（腹部単純X線）では結石除去率100%が確認されました（図4）。手術中、安倍先生は繰り返し「腎機能保護が最優先です」と強調しました。灌流液の圧力調整や手術時間の管理を通して、腎実質への損傷を最小限に抑えていました。このような「臓器保護を最重要とする」手術方針は、私の今後の臨床実践においても重要な指針となっています。

三か月間の研修を通して、技術面での学びも大きかったのですが、それ以上に私の心に残ったのは、亀田総合病院チームの「協働の精神」と「患者さんへの細かな配慮」です。手術室の壁面に掲示された操作ガイドの表示や、器械台の規則正しい配置など、ここでは「手順の整備と人に優しい配慮」が両立した医療環境が実践されていました。

帰国の際、安倍先生からご自身が執筆された『新・女性泌尿器科テキスト』を贈っていただき、扉ページには「医学に終わりではなく、共感こそ原点である」と書かれていました。この言葉は、今回の研修を通じて私が最も深く心に刻んだ学びです。手術室での場面や4Kモニター上の操作の細部は、単なる研修記録にとどまらず、私の今後の臨床実践における学びの“手本”となっています。帰国後は、亀田総合病院で学んだLSCやTVMなどの技術を、少しずつ臨床に応用していくとともに、同院の人間性に基づく配慮の理念も参考にし、中国国内の女性泌尿器科患者さんにより質の高い診療を提供していきたいと考えています。今回の日本での研修経験は、決して終着点ではなく、私が泌尿器科医として探求を続け、成長し続けるための新たな出発点であると実感しています。今後は、この学びと気づきを胸に、患者さんの健康を守る道を歩み続けていきたいと思っています。

国立癌症研究中心中央医院研修感想

邵 晓娜

宁波市医疗中心李惠利医院 消化内科

我是一名来自宁波市医疗中心李惠利医院的消化内科医生。2024年获医院首批“杏林行者”奖学金资助，于当年12月赴日本国立癌症研究中心中央病院（NCCH）开展为期9个月的研修。入科后，在斋藤丰主任团队系统带教下，围绕消化道早癌的内镜诊断与治疗进行全流程学习，并定期承担全英文 Colorectal Cancer Conference 病例汇报。经科室培训、资质审核及医院上报，我获得日本厚生劳动省颁发的消化内镜操作许可。同时，在斋藤主任和丰岛老师的支持和指导下，我以第一作者完成的病例报道已被国际期刊 Endoscopy (IF 12.8) 接收。

一、从细节抵达信任：医患沟通的“安静力量”

NCCH的检查流程朴素却有效：迎检护士用简明语言解释步骤，医生以自报姓名与鞠躬开场，三方核对身份后再启动操作。常规检查不用麻醉，医生与护士在关键节点以“提醒—执行—致谢”的节奏推进；患者始终清醒但不焦虑。结束时医生即时反馈要点，后续安排清晰。全程没有一句冗词，却让“被尊重、被理解”的感受贯穿始终。它不依赖“话术”，而依赖可复制的流程与态度。对照国内高峰期段的就诊强度，这种做法未必可原样移植，但有关“前置沟通、过程提示、结果总结”的三个节点完全可以在本土场景中标准化、模板化。

二、循证直达指南：多中心协作让随访更简洁

NCCH既牵头也深度参与多家医院的临床研究，通过长期随访沉淀真实世界数据，并据此推动指南迭代。以早期胃癌为例：针对直径<3 cm、分化型、黏膜下浸润≤500 μm的病例，基于多中心证据，随访策略由以往的 eCureB 调整为更简化的 eCureA，既降低患者负担，也提高资源配置效率。让我印象深刻的是：作为国家级中心，不仅承担领衔作用、更主动融入外部课题，用一致的入排标准和严格的数据质控，换来可推广的结论。这对我们同样具有启发——推动指南不只靠“单中心高水平”，更仰赖区域协作网络与数据的可比性、可复制性。

三、MDT常态化：用讨论“消化”不确定性

内镜科按上、下消化道分组，每周例会对接拟行ESD的病例进行术前展示：白光、NBI与靛胭脂/碘剂/结晶紫等染色图像逐项呈现，并结合放大所见讨论浸润深度、边界与诊断依据。随后与外科团队进行针对性联合讨论：食管对接食管外科，胃/十二指肠对接胃外科，结肠对接大肠外科。每月的“内镜—病理复盘会”则聚焦内镜诊断与病理诊断不一致的病例，逐张切片对应当时内镜判断，厘清分歧来源。这样的“术前共识—术中分工—术后复盘”闭环，使个体化方案更可辩驳、也更可复制。

四、致谢与期许

在日本寻找能长期接收外籍医生研修的医院并不容易。此次顺利成行，离不开日中医学交流中心在语言、签证与住宿等方面的全程支持，以及与日本医疗机构的对接协助。因为这份保障，我才能在异国专注学习。研修让我更坚信：规范、协作与复盘，是把“经验”变成“能力”的关键。回国后，我将继续在临床实践落实这些细节，在课题与随访中积累可用证据，以专业与坦诚回馈患者，也为本土消化内镜的高质量发展尽一份力。



*右图：研修期间留影
*右图：研修記念撮影

国立がん研究センター中央病院研修所感



邵 晓娜

宁波市医疗中心李惠利医院 消化器内科

私は、宁波市医療センター李惠利医院消化器内科の医師として、所属病院の「杏林行者」奨学金の支援を受け、2024年12月より日本国立がん研究センター中央病院（NCCH）にて9か月間の研修を行いました。内視鏡科入科後は、斎藤豊科長のご指導のもと、消化管早期癌の内視鏡診断および治療について体系的に学ぶとともに、定期的に開催される英語による Colorectal Cancer Conference では症例報告を担当する機会にも恵まれました。また、診療科での研修及び資格審査、厚生労働省への申請を経て、消化管内視鏡の操作に関する外国医師臨床修練資格の承認を受けました。更に、斎藤科長と豊嶋先生のご指導とご支援のもと、第一著者として執筆した症例報告が国際学術誌 Endoscopy (IF 12.8) に採択されるなど、臨床・研究の両面で大変貴重な経験を積むことができました。

1. 細部へのこだわりが生む信頼——医療者と患者をつなぐ「静かな力」

NCCH の検査フローは、極めて簡潔でありながら実に効果的です。検査前には担当看護師が手順を明瞭に説明し、医師は自ら名乗って一礼したうえで診療を開始します。患者・看護師・医師の三者で本人確認を行い、その後操作へ移行するというプロセスが徹底されています。通常の内視鏡検査では鎮静を用いず、医師・看護師が「声かけ—操作—感謝」という一連のプロセスを丁寧にを行い、患者は覚醒状態であっても不安を感じにくい点が印象的でした。検査終了後には、患者に重要な点が簡潔に伝えられ、今後の方針も明確に示されます。この一貫した流れは、過度な話術に頼らずとも患者に「尊重され、理解されている」という安心感を与え、業務フローと態度が一体となって実現しているものだと感じました。中国国内の外来負荷の高さを考えると、完全な導入は容易ではありませんが、「事前説明・適切な声かけ・フィードバック」という三つの要素は十分に標準化・プロセス化し得ると感じました。

2. エビデンスからガイドラインへ—多施設共同研究がもたらす効率的なフォローアップ

NCCHは多くの医療機関の臨床研究を主導すると同時に、外部研究にも積極的に参画し、長期的なフォローアップによってリアルワールドデータを蓄積し、その成果をもとにガイドラインの改訂を推進しています。たとえば早期胃癌では、腫瘍径 3 cm 未満・分化型・粘膜下浸潤 500 μm 以下といった症例に対し、多施設データに基づきフォローアップ方針が従来の eCureB から、より簡素化された eCureA へと見直されました。これにより患者負担の軽減と医療資源の最適化が図られており、その効果を現場で実感しました。印象的だったのは、ナショナルセンターとして、単に主導的役割を担うにとどまらず、外部の研究課題にも積極的に参加し、統一された適格基準と厳密なデータ品質管理のもと、再現性・汎用性の高い結論を導き出している点です。ガイドラインの発展には、単一施設の高度医療だけでなく、地域に広がる協働ネットワークと、比較可能で検証可能なデータが不可欠であることを改めて強く認識しました。

3. MDT の常態化：討議によって不確実性を“消化”します

内視鏡科では上部・下部消化管にチームを分け、週例カンファレンスで ESD 予定症例の術前プレゼンテーションを行っています。白色光、NBI に加え、インジゴカルミン/ヨード/クリスタルバイオレットなどの色素内視鏡画像を順に提示し、拡大所見と合わせて浸潤深達度、病変範囲、診断根拠を多角的に検討します。その後、疾患部位に応じて外科チームと合同でディスカッションを行い、食道は食道外科、胃・十二指腸は胃外科、大腸は大腸外科が担当します。また、月例の「内視鏡—病理レビュー会」では、内視鏡診断と病理診断の所見が一致しなかった症例を対象に、当時の内視鏡判断と切片を照合し、相違の要因を明確にしています。このような「術前の合意形成—術中の役割分担—術後のレビュー」という循環が、個別化治療方針の妥当性と再現性を一層高めています。

4. 謝辞と今後の展望

外国人医師として日本で中長期の研修機会を得ることは決して容易ではありません。このたび無事に研修を開始し、充実した日々を過ごすことができたのは、日中医学交流センターの皆様より、言語・ビザ・宿泊などあらゆる面で多大なご支援を頂き、日本側医療機関との調整にもご尽力いただいたおかげです。こうした確かなサポートがあったからこそ、海外でも臨床と研究に専念することができました。今回の研修を通じて、「標準化」「協働」「振り返り」こそが、経験を再現性のある能力へと昇華させる鍵であると改めて実感しました。帰国後は、臨床の診療において研修で得た知見を実践するとともに、研究課題およびフォローアップを通じて臨床に還元できるエビデンスを蓄積し、専門性と誠実さをもって患者さんに貢献していく所存です。今後も、消化内視鏡の質の高い発展に寄与できるよう努めてまいります。

国立癌症研究中心东医院研修感想

陈商琪

宁波市第二医院 胃外科

2025年6月2日至2025年8月29日期间，我有幸赴日本并在国立癌症研究中心东医院进行研修学习。现将出访情况报告如下：

研修的第一阶段（前两个月），我在胃外科，跟随木下敬弘主任进行学习与手术观摩；第二阶段（最后一个月），我转至消化管内镜中心，跟随矢野友规主任深入学习消化道内镜的操作与诊疗技术。

在木下主任的胃外科研修中，我深刻体会到诊疗的每一个细节都至关重要。从术前准备（每位胃癌患者术前都会进行胃镜下肿瘤及切缘定位），到术中操作（使用达芬奇机器人进行精细化操作），再到术后恢复（主管医师密切关注患者的术后病情变化），每一环节的细致入微都是确保患者康复的关键。木下主任特别强调，精细化操作、标准化治疗和个性化护理是确保患者术后恢复的基础。在达芬奇机器人辅助手术中，我学会了如何精准控制手术视野与器械操作，并深刻理解了精细手术对预防术后并发症的重要性。

日本对医疗教学的高度重视，也让我在研修过程中受益匪浅。作为一所国家级医院，科室中有超过一半的医生为resident，他们不仅参与手术，还积极参与查房、讲课以及MDT会议，体现了医疗知识的传承。在手术室中，我看到了国立癌症研究中心的医生、护士及其他医务人员的密切配合和相互尊重，医院内有着严格的流程和规定，使我认识到，医疗不仅仅是治疗疾病，更重要的是全面帮助患者康复。

在消化管内镜中心的研修中，我学习了多种内镜技术，包括胃肠镜检查、内镜下活检和治疗手段。通过每日的观摩，我深刻意识到，内镜技术的发展使得消化道疾病的早期诊断和治疗变得更加精准与便捷。在国癌东医院，我特别注意到内镜中心胃镜的病理活检相对较少，这与医院所使用的先进仪器密切相关——这些仪器能够将视野放大至150倍，从而在较大程度上区分良性与恶性病变。矢野主任在教学中反复强调，内镜治疗的细节管理至关重要，尤其是在操作过程中要尽量避免对患者产生不必要的创伤，以确保治疗的精准性和安全性。除了日常的内镜操作，我还观摩了内镜下活检技术及新型内镜设备的应用。

通过在日本国立癌症研究中心东医院为期三个月的研修，我深入了解了日本在消化系统疾病治疗中的先进技术，特别是在胃癌手术中的精细化操作和先进设备的应用，提高了手术治疗的精准度。此外，内镜技术的革新让我对早期诊断和治疗的精准性有了更深刻的理解。在此期间，我不仅提升了胃外科和消化管内镜的临床技能，还深入了解了国际医疗环境中的工作流程、设备使用及团队协作。感谢医院为我提供了这样一个宝贵的出国学习机会，感谢日本国立癌症研究中心东医院给予我在贵院研修的宝贵机会，也十分感谢日中医学交流中心的各位老师在此期间帮助，这段经历无疑将成为我职业生涯中的宝贵财富，为未来的医疗实践奠定坚实的基础。

*右图：研修期间留影

*右图：研修記念撮影



国立がん研究センター東病院研修所感



陳商琪

宁波市第二医院 胃外科

2025年6月2日から8月29日にかけて、日本において研修の機会を賜り、国立がん研究センター東病院にて研修させていただきました。ここに、下記のとおり研修内容をご報告申し上げます。

研修の最初の2か月間は胃外科木下敬弘科長のご指導のもと、診療および手術見学を中心に研鑽を積みました。残り1か月間は消化管内視鏡科に移り、矢野友規科長のもとで、消化管内視鏡操作ならびに診断・治療技術について専門的に学びました。

胃外科における研修では、診療のあらゆるプロセスにおいて細部への配慮が極めて重要であることを身をもって実感しました。術前準備（すべての胃癌患者に対し、内視鏡下で腫瘍および切離線マーキングを実施）、術中操作（ダヴィンチロボットを用いた高精度な手技）、術後管理（担当医による緻密な経過把握）に至るまで、すべての丁寧な対応が、患者さんの良好な回復につながる根幹であると理解しました。木下先生からは、精緻な操作、標準治療、そして患者一人ひとりの状況に応じた細やかなケアこそが、安定した術後経過を支える基盤であるとのこと唆を頂きました。ダヴィンチロボット支援手術では、術野のコントロールや鉗子操作を正確に行うための技術を学ぶとともに、高度な精密性が術後合併症の予防に大きく寄与することを改めて理解しました。

日本における医療教育が重視されている環境のもとで、研修中には多くの学びを得ることができました。ナショナルセンターとして、診療科医の半数以上をレジデントが占め、手術のみならず病棟回診、講義、MDTなどにも積極的に関わり、医療知識の継承が徹底されています。手術室では、医師・看護師をはじめとする医療スタッフが緊密に連携し、互いに敬意を払って業務にあたっている姿が印象的でした。また、院内には厳格なフローと規定も整備されています。医療とは単に疾病を治療する営みではなく、患者の回復を多面的に支える総合的な活動であることを改めて認識しました。

一方、消化管内視鏡センターでは、上部・下部内視鏡検査、内視鏡下生検、さらには種々の治療手技など、多岐にわたる内視鏡技術を学ぶ機会に恵まれました。日々の見学を通じて、内視鏡技術の進歩により、消化管疾患の早期診断・治療が一層精密かつ効率的に行われていることを強く実感しました。特に東病院では、最大150倍までの拡大観察が可能な高性能内視鏡機器が導入されているため、胃内視鏡検査における病理生検が比較的少ないことが印象的でした。高精度な拡大観察により、良悪性の鑑別がより正確に行えるためとのことでした。矢野先生は、内視鏡治療では細部の管理が極めて重要であり、特に操作中に患者へ不要な損傷を与えないよう細心の注意を払うべきだという点を、常に強調されていました。日頃の内視鏡操作に加えて、内視鏡下生検技術や新型内視鏡デバイスの応用についても学ぶことができ、大変有意義な研修となりました。

今回の3か月間の研修を通じて、日本の消化器疾患治療における先進的な技術、特に胃癌手術における精緻な操作と先端機器の活用に対して理解を深め、手術治療の質向上に対する認識が一層高まりました。また、内視鏡技術の革新に触れることで、早期診断・治療の精度向上が著しいことを改めて実感しました。研修期間、胃外科および消化管内視鏡の臨床技術を磨いただけでなく、国際的な医療現場における業務フロー、医療機器の運用、多職種連携の在り方についても多くの学びを得ることができました。この度、海外研修という貴重な機会を提供してくださった所属病院、本研修を受け入れてくださった国立がん研究センター東病院に心より感謝申し上げます。また、滞在中に多大なるご支援を賜った日中医学交流センターの皆様にも深く御礼申し上げます。この経験は、私の今後の医療キャリアにおける大きな財産となり、将来の臨床実践において確かな基盤となるものと確信しております。

大阪重粒子線中心研修感想

周 云

徐州市中心医院 放射腫瘤科 主任

2025年10月至12月，我有幸前往日本大阪重粒子線中心研修，師從鈴木修中心主任代理。三個月的研究時光，讓我沉浸式接觸了頂尖的重粒子治療技術與診療理念，在臨床技術、科研思維、診療模式等方面實現了全方位的提升與突破，更對現代高精度癌症放療的發展有了更為深刻的認知，收穫頗豐、感悟良多。

大阪重粒子線中心作為日本大阪首家碳離子放射治療機構，憑借“市中心30分鐘交通圈、世界最小同步加速器、全端口柵掃描”三大特色，在國際粒子治療領域佔據重要地位。這裡不僅擁有日立小型化同步加速器、6軸機器人床、實時呼吸追蹤等頂尖設備，更覆蓋診斷-治療-隨訪的全過程，其中宮頸癌-婦科腫瘤、前列腺與泌尿腫瘤、骨與軟組織肉瘤、胰腺-肝胆系統腫瘤等多個病種的治療上取得的卓越成效，讓我真切感受到了精準重粒子線治療為腫瘤患者帶來的希望。大阪重粒子線中心的“門診-日歸”模式、高效的 multidisciplinary (MDT) 體制，以及嚴謹的質量控制體系，更是讓我看到了現代化醫療機構以患者為中心的服務理念與專業素養，為我後續的學習和工作樹立了標杆。

研修期間，我全身心投入中心的臨床、物理、質控等各個環節的工作，輪轉診療部、醫學物理部、技術部等核心部門，全方位參與重粒子治療的全流程。在臨床診療中，我系統學習了碳離子適應症和劑量分割等關鍵內容，參與新評估百餘例，獨立完成23例涵蓋宮頸癌、前列腺癌、骶骨脊索瘤等多種病種的重粒子線治療計劃；在醫學物理領域，熟練掌握了日立治療計劃系統的操作，完成靶區勾畫、束流角度優化、劑量驗證等一系列工作。在鈴木中心主任代理的指導下，我制定的前列腺癌治療計劃實現了靶區精準照射與正常組織有效保護；在質量保證方面，深度參與十餘項QA流程，掌握了高LET束流的質控標準與檢測方法。同時，我重點專修了宮頸癌、脊索瘤、復發頭頸癌再程放療等核心技術，近距離觀摩學習了中心針對各類難治性腫瘤的先進治療方案與技術細節，對重粒子治療的技術精髓有了更為直觀的理解。

其中，多學科協作體系是此次研修的一大重要收穫。每日定期舉行的多學科協作會議，讓我看到了多學科整合診療的真正內涵。這種協作並非簡單的病例討論，而是貫穿患者診療全程的無縫銜接機制，放射科醫師、醫學物理師、診斷放射技師、護士等多學科人員各司其職、緊密配合，從患者初診評估、治療計劃制定，到治療實施、隨訪，每一個環節都凝聚著多學科的智慧。作為唯一的外籍進修醫師，我參與了37例病例的討論，親眼見證了多學科人員如何基於患者的具體病情，共同制定最優的治療策略，實現“療效-安全-生活質量”的三維平衡。這種“決策共担、責任共負”的多學科協作體系，讓我深刻認識到，對於腫瘤尤其是難治性腫瘤的治療，僅依靠醫師個人的力量遠遠不夠，多學科的深度融合才是提升治療效果、保障患者權益的關鍵。

大阪重粒子線センター研修所感



周 曇

徐州市中心医院 放射線腫瘍科 部長

2025年10月から12月までの約3か月間、私は大阪重粒子線センターにて研修する機会を賜り、鈴木修センター長代理のご指導のもと研鑽を積ませていただきました。3か月にわたる研修を通じて、最先端の重粒子線治療技術ならびにその診療理念に集中的に触れることができ、臨床技術のみならず、研究的思考および診療体制への理解においても大きな成長を遂げることができました。さらに、現代における高精度ながん放射線治療の発展について、より一層理解を深めることができ、多くの学びと気づきを得た実り豊かな研修となりました。

大阪重粒子線センターは日本の大阪初の重粒子線(炭素線)治療施設として、「市の中心から30分圏内のアクセス」「世界最小クラスのシンクロトン」「フルポートスキニング照射」という三つの特長を有し、国際的な粒子線治療分野において確固たる地位を築いています。日立製小型シンクロトン、6軸ロボット治療台、リアルタイム呼吸追跡システムなどの先端設備を備えるのみならず、診断・治療・フォローアップまでを網羅しています。特に、子宮頸癌・婦人科腫瘍、前立腺癌・泌尿器腫瘍、骨軟部肉腫、痔瘻・肝胆道系腫瘍などにおける優れた治療成績は、精密な重粒子線治療が患者にもたらす希望を、身をもって実感することができました。大阪重粒子線センターの外來・日帰り治療モデル、効率的な多職種連携(MDT)体制、厳格な品質管理体制、また、現代的医療機関における患者中心の医療理念と高い専門性を実感するとともに、今後の学習と臨床実践における明確な指標となりました。

研修期間中は、センターにおける臨床、医学物理、品質管理など各部門の業務に没頭し、診療部、医学物理部、技術部といった中核部門をローテーションしながら、重粒子線治療の全プロセスにわたり包括的に参画いたしました。臨床においては、炭素イオン線治療の適応症や線量分割について体系的に学び、新規症例100例以上の評価に参加し、子宮頸癌、前立腺癌、仙骨脊索腫など多様な疾患を含む23例の重粒子線治療計画を独自に作成しました。医学物理分野においては、日立の治療計画システムの操作を習熟し、標的輪郭描出、ビーム角度の最適化、線量検証など一連の業務を遂行しました。鈴木センター長代理のご指導の下、私が作成した前立腺癌の治療計画では、標的への高精度照射と正常組織保護の両立が達成できました。品質保証分野では10項目以上のQAプロセスに深く関与し、高LETビームの品質管理基準と測定法を習得しました。また、子宮頸癌、脊索腫、再発頭頸部癌の再照射などの中核技術を重点的に研修し、難治性腫瘍に対する先進的治療法と技術的要点を間近に学び、重粒子線治療の技術的精髓についてより実感をもって理解することができました。

なかでも、多職種連携(MDT)体制は、今回の研修における重要な成果の一つです。毎日定例で開催される多職種連携(MDT)体制を通じて、多職種が連携し統合的に診療を行うことの真の意義を実感いたしました。このような協働は、単なる症例検討にとどまるのではなく、患者の診療プロセス全体を貫くシームレスな連携体制であると感じました。放射線科医、医学物理士、診療放射線技師、看護師など多職種がそれぞれの専門性を発揮しながら緊密に連携し、初診時評価から治療計画の策定、治療実施、さらにはフォローアップに至るまで、あらゆる段階において多職種の知見と経験が結集されていました。私は唯一の外国人研修医師として37例のカンファレンスに参加し、多職種のスタッフが患者一人ひとりの具体的な病状に基づき、「治療効果・安全性・生活の質(QOL)」という三つの要素のバランスを実現するため最適な治療戦略を共同で策定する過程を間近で拝見いたしました。このような「意思決定を共に担い、責任も共に負う」多職種連携(MDT)体制を通じて、腫瘍、特に難治性腫瘍の治療においては、医師の力だけでは決して十分ではなく、多職種の高度な融合こそが治療効果の向上と患者の権益の保障につながる重要な鍵であることを強く認識いたしました。

研究能力の向上と研究的思考の形成も、今回の研修におけるもう一つの重要な成果でした。大阪重粒子線センターは、臨床治療において顕著な成果を

科研能力的培养与科研思维的塑造，是此次研修的另一重要成果。大阪重粒子线中心不仅在临床治疗上成果斐然，更在科研领域走在国际前沿。研修期间，我结合自身研究方向与国家自然科学基金标书内容，深入推进宫颈癌放疗抵抗相关研究，聚焦 LncRNA 与放疗敏感性的关系，完成了 FA 修饰的工程化外泌体-siRNA 纳米递药体系的构建与表征，初步证实了该体系与放疗联合应用的增效作用。同时，我在中心先进的小照射野平台上接受了系统培训，掌握了精准的小肿瘤靶区定位与照射技术，为后续开展体内实验奠定了坚实基础。中心浓厚的科研氛围、严谨的科研态度，以及“以临床问题为导向”的科研思路，让我深受启发，也让我更加明确了临床与科研相结合的发展方向。

此外，研修期间我与以铃木中心主任代理为代表的中心工作人员建立了良好的学术交流关系，通过定期的病例讨论会、学术交流，与大阪重粒子线中心的医师等就病例、研究进行深入探讨，不仅深化了对重粒子治疗技术的理解，更初步规划了未来的国际合作方向。大阪重粒子线中心的医师也表示愿意来华开展专题讲座，为后续的学术交流与合作搭建了桥梁。

三个月的研修，不仅让我掌握了重粒子放疗的全链条核心技术，更新了肿瘤治疗的理念，更让我领悟到了现代癌症治疗的“道”与“术”。所谓“术”，是精准的治疗技术、严谨的质控体系、高效的操作流程；所谓“道”，是以患者为中心的服务理念、以多学科协作为支柱的诊疗模式、以临床科研为驱动力的发展思路。这些收获与感悟，为我今后的工作指明了方向，也让我深感肩负的责任与使命。

回国后，我会将此次研修所学与实际工作相结合，将先进的技术、理念与模式落地化。一方面，主导构建并优化质子重粒子治疗的标准化临床路径，建立完善的患者筛选评估规范、全流程质控体系与随访疗效数据库；另一方面，积极推动建立深度融合的多学科协作体系，组建固定的质子重粒子治疗 MDT 小组，推动康复治疗早期介入，让多学科协作贯穿诊疗全程。同时，以临床问题为导向，启动高水平的临床与转化研究，开展华东人群质子重粒子治疗的真实世界研究，探索联合免疫、靶向治疗的新策略，搭建基础研究与临床应用的转化桥梁。此外，我将致力于本土质子重粒子治疗专业团队的培养，通过系列专题讲座、工作坊、线上联合研讨会等形式，分享研修成果，提升团队整体专业水平，同时制作科普材料，向患者和社会正确解读质子重粒子技术，树立专业的品牌形象。

此次赴日研修，是一次宝贵的学习经历，更是一次自我提升与成长的旅程。我将以此次研修为新的起点，把所学、所思、所悟运用到实际工作中，不断精进专业技术，创新诊疗模式，推动科室质子重粒子治疗技术的发展与进步，为更多癌症患者提供更精准、更高效、更优质的医疗服务，不辜负医院与项目给予的宝贵机会。同时，我也将持续加强与大阪重粒子线中心等国际顶尖机构的学术交流与合作，紧跟国际癌症放疗的发展前沿，为推动区域高精度癌症放疗事业的发展贡献自己的力量。



在欢迎会上与铃木修中心主任代理（左起第二位）及工作人员合影
铃木修センター長代理（左から2人目）を囲んでスタッフの皆さんと歓迎会にて

挙げているだけでなく、研究分野においても国際的な最前線を走っていることを強く実感いたしました。研修期間中、私は自身の研究テーマおよび(中国)国家自然科学基金課題と連動させ、子宮頸癌の放射線抵抗性機序、とりわけ LncRNA と放射線感受性の関連に着目し、FA 修飾エンジニアリングエクソソーム-siRNA ナノドラッグデリバリーシステムの構築と特性評価を完了いたしました。さらに、本システムと放射線治療との併用による増感効果についても初期的な有効性を確認することができました。また、小照射野プラットフォームにおいて体系的なトレーニングを受け、微小腫瘍標的の高精度な位置決めおよび照射技術を習得いたしました。これにより、今後の生体内実験を円滑に進めるための確固たる基盤を築くことができました。センターの濃厚な研究風土と厳謹な研究姿勢、そして「臨床課題を起点とする」研究発想に深い感銘を受け、今後の臨床・研究融合の発展方向性をより明確にすることができました。

さらに、研修期間中には鈴木センター長代理をはじめとするセンターのスタッフとも良好な学術交流関係を築くことができました。定期的なカンファレンスや学術交流を通じて、症例や研究について大阪重粒子線センターの医師等と踏み込んだ議論を行い、重粒子線治療技術への理解を一層深めるとともに、将来における国際協力の方向性についても初期的な構想を描くことができました。また、大阪重粒子線センターの医師からは中国での特別講演実施にも前向きなご意向をいただき、今後の学術交流および協力体制構築に向けた重要な架け橋が築かれました。

3か月間の研修を通じて、私は重粒子線治療の全プロセスにわたる技術的核心を習得し、腫瘍治療に対する理念を刷新することができただけでなく、現代のがん治療における「道」と「術」の本質を学ぶ機会となりました。いわゆる「術」とは精緻な治療技術、厳密な品質管理体制、効率的な運営体制であり、「道」とは患者中心の理念、多職種連携を基盤とする診療モデル、そして臨床研究を発展の原動力とする思考体系であると理解いたしました。これらの学びと気づきは、今後の自身の進むべき方向を明確にするとともに、担うべき責任と使命の重さをあらためて自覚させるものでした。

帰国後は、今回の研修で得た知識と経験を実際の業務に結び付け、先進的な技術・理念・運営モデルの実装に取り組んで参ります。一方では、陽子線・重粒子線治療の標準化されたクリニカルパスの構築および最適化を主導し、患者選定・評価基準の整備、全プロセスにわたる品質管理体制の確立、ならびに治療効果の追跡データベースの構築を進めてまいります。また、より深く統合された多職種連携(MDT)体制の構築を積極的に推進し、固定メンバーによる陽子線・重粒子線治療MDTチームを編成するとともに、リハビリテーションの早期介入を促進し、多職種連携が診療の全過程を貫く体制の確立に努めてまいります。同時に、臨床課題を起点として高水準の臨床研究およびトランスレーショナルリサーチをスタートさせ、華東地域の患者集団を対象とした陽子線・重粒子線治療のリアルワールド研究を展開するとともに、免疫療法・分子標的治療との併用による新たな治療戦略の探索を進め、基礎研究と臨床応用をつなぐ橋渡し体制の構築に取り組んでまいります。さらに、中国国内における陽子線・重粒子線治療の専門チーム育成にも尽力してまいります。シリーズ専門講座やワークショップ、オンライン合同セミナーなどを通じて研修成果を共有し、チーム全体の専門性向上を図るとともに、一般人向けの啓発資料を作成し、患者および社会に対して陽子線・重粒子線治療技術を正しく分かりやすく伝えることで、専門性に裏付けられた信頼あるブランドの確立に努めてまいります。

今回の訪日研修は、私にとって大変貴重な学習の機会であると同時に、自己研鑽と成長の歩みでもありました。今回の研修を新たな出発点として、学んだこと、考えたこと、そして得た気づきを実務に生かし、専門技術のさらなる向上と診療モデルの革新に努め、当科における陽子線・重粒子線治療技術の発展と進歩を力強く推進してまいります。そして、より多くのがん患者に対し、より精密で、より効率的かつ質の高い医療サービスを提供できるよう尽力し、病院および本プロジェクトより賜りました貴重な機会に報いてまいる所存です。また、大阪重粒子線センターをはじめとする国際的トップレベルの医療機関との学術交流・協力を継続的に強化し、国際的ながん放射線治療の最前線を常に視野に入れながら、地域における高精度ながん放射線治療の発展に貢献してまいります。

癌研有明医院研修感想

翟升永

潍坊市人民医院 胃肠外科

我是一名来自山东省潍坊市人民医院的胃肠外科副主任医师。2024年，我有幸入选潍坊市首批青年医学人才托举工程项目，并于2025年8月赴日本癌研有明医院（Cancer Institute Hospital of JFCR）胃外科，开启临床研修之旅。入科以来，在布部创也部长及其团队/system带教下，我围绕胃癌的诊断与治疗开展了全流程、浸入式的学习与观察。现将主要见闻与体会汇报如下：

一、手术时长背后的“慢功细活”

初抵日本，布部创也部长便多次强调：卓越的临床结局，源于对每一个诊疗环节的精益求精。从术前准备——每例胃癌患者术前均接受胃镜下肿瘤及切缘的精确定位；到术中操作——广泛运用达芬奇机器人进行精细化解剖；再到术后管理——主管医师每日动态追踪病情变化，每一处细节的周密考量，皆为患者顺利康复之基石。目前，该院每例胃癌手术平均耗时约六小时，术前麻醉准备约1.5至2小时，术后标本处理亦需近两小时。这种“慢”并非效率不足，而是精细使然——从切口设计到淋巴结清扫，从能量器械使用到术野保护，每一步皆力求极致，更为可贵的是，这种精细已内化为每一位术者的职业本能，贯穿于手术全程。

二、标准化落实：“谋定而后动”的临床智慧

在整体治疗策略层面，我国与日本的差距正逐步缩小，但在细节落地上仍有一定距离。以术中胃镜应用为例：术前定位、术中再确认、吻合后复查——这一流程国内多数医院虽具备完成能力，却尚未成为常规操作，而吻合口相关并发症恰是临床纠纷的高发原因。术后标本处理亦然，虽有部分中心已形成规范，但整体执行力仍有提升空间。

值得深思的是，在日本，外科技术虽受尊重，却从未被置于诊疗的核心。他们更强调术前评估与全局谋划：该不该手术？何时手术？如何手术？正如战场胜负，局部战术的胜利无法弥补战略布局的失误，唯有“谋定而后动”，方能在复杂局面中掌握主动。

观摩日本同道手术，最深刻的印象是贯穿始终的“从容不迫”与“无血手术”理念。他们操作沉稳，珍惜每一滴血，遇出血必先稳妥处理再继续推进，如此节奏，使术野始终清晰、层次分明。若以国内某些“漂亮”手术的标准衡量，这种风格未必惊艳，但细察之下，那份从容背后，是对患者安全最深沉的守护。

三、教学传承：在协作中精进，在传承中延续

日本医疗体系对临床教学的高度重视，令我受益匪浅。作为国家级癌症中心，胃外科的研修医生，他们不仅参与手术，更活跃于查房、授课及MDT讨论，充分体现知识与经验的有序传承。

がん研有明病院研修所感



翟昇永

潍坊市人民医院 消化管外科

私は中国山東省潍坊市人民医院消化管外科の副主任医師です。2024年、潍坊市第1期若手医学人材育成支援プロジェクトに選出いただき、2025年8月より日本のがん研有明病院（Cancer Institute Hospital of JFCR）胃外科にて臨床研修を開始いたしました。入局以来、布部創也部長ならびにチームの先生方による体系的なご指導のもと、胃癌の診断・治療を中心に、診療の全過程を通じて集中的な学習・見学を重ねてまいりました。

ここに、これまでの主な所見および所感をご報告申し上げます。

一、手術時間の背後にある「丁寧を極める姿勢」

来日当初より、布部創也部長は繰り返し「卓越した臨床成績は、診療のあらゆるプロセスを徹底的に磨き上げることから生まれる」と強調されていました。

術前準備においては、すべての胃癌症例に対し、内視鏡下で腫瘍および切除断端の正確な位置同定を行います。術中はダヴィンチ手術支援ロボットを活用し、精緻な解剖学的操作を徹底しています。さらに術後管理においても、主治医が日々病状を動的に評価し、あらゆる細部にまで目を配ります。こうした一つ一つの積み重ねが、患者の円滑な回復を支える礎となっています。

現在、がん研有明病院における胃癌手術の平均所要時間は約6時間、麻酔導入・手術準備に約1.5～2時間、術後の標本処理にも約2時間を要します。この一見「長い」とも受け取られかねない時間は、決して効率の低さを意味するものではなく、むしろ徹底した精緻さの現れです。皮膚切開のデザインからリンパ節郭清、エネルギーデバイスの適切使用、術野の保護に至るまで、あらゆる工程で最善を尽くしています。さらに貴重なのは、この精緻さが術者一人ひとりの職業的本能として内面化され、手術の全過程を通じて一貫して発揮されている点です。

二、標準化の徹底——「謀定して後に動く」という臨床の知恵

治療戦略全体の観点から見れば、中国と日本の差は着実に縮まりつつあります。しかし、細部の徹底という点においては、なお改善の余地があると感じました。術中内視鏡を例に挙げますと、術前マーキング、術中の再確認、吻合後の最終チェックという一連のプロセスは、日本では標準的手順として確立されています。中国国内においても実施可能な施設は少なくありませんが、いまだ日常的なルーチンには至っていないのが現状です。しかし、吻合部関連合併症はまさに医療トラブルの高頻度原因でもあります。術後標本の処理についても同様で、一部施設では標準化が進んでいるものの、全体としての実行力にはなお向上の余地があります。

また印象的だったのは、日本では外科技術が高く尊重されながらも、決して診療の中心に置かれてはいないという点です。より重視されるのは術前評価と全体戦略の構築、すなわち「手術すべきか」、「いつ行うか」、「どのように行うか」です。戦場において局地的勝利が戦略的失敗を補えないのと同様に、「謀定して後に動く」姿勢こそが、複雑な臨床状況において主導権を握る鍵なのだ実感しました。

さらに、日本の同分野の先生方の手術を見学して最も強く感じたのは、「泰然自若」と「無血手術」という理念です。操作は終始落ち着いており、血液の一滴一滴を大切に扱い、出血があれば必ず確実に止血し

胃外科四位主刀教授，除机器人手术或极复杂步骤外，几乎全程担任第一助手。令我震撼的是，他们凭借低出血量的手术风格、反复研习手术录像的治学态度，实现了高强度、高质量的青年医师培养——也使团队手术风格高度统一，成为低并发症率的重要基石。教授们（包括国内熟知的布部创也教授）作为一助，从超声刀的使用方向、组织间隙的显露，到电凝力度的调节，无不手把手传授、反复纠正。即便研修医生一时难以到位，旁观者已暗自着急，台上的教授们却始终和颜悦色、耐心引导。这份从容，或许正是充裕时间赋予的教学底气。这一切让我更加确信：医疗的本质，不仅是治愈疾病，更是传承中的延续。

四、分级诊疗与科研取向：从临床问题出发的循证实践

该院患者基本为转诊来源，转至癌研有明医院的，多为高龄（80岁以上占比过半）、合并多种基础病、接受过术前治疗或复发的进展期胃癌，其病情复杂程度与国内并无显著差异。值得关注的是，日本临床医生大多不从事基础研究，而是以改变临床指南的大规模多中心试验为重点——这一取向，为我国临床科研的转型提供了有益借鉴。

五、致谢与展望

在日本，能够长期接收外籍医生研修的机构实属不易寻觅。本次顺利成行，得益于日中医学交流中心在语言、签证、住宿等环节的全程支持，以及与日方医疗机构的精准对接。正是这份保障，使我得以全身心投入临床学习与科研思考。

这段研修经历让我更加坚信：规范、协作与复盘，是“经验”升华为“能力”的必由之路。归岗后，我将持续在临床工作中践行这些细节，在课题与随访中积累可验证的证据，以专业与真诚回馈患者，也为我国胃外科的高质量发展贡献绵薄之力。



研修期间留影／研修記念撮影

てから次の工程へ進みます。その結果、術野は常に明瞭に保たれ、解剖学的層構造が鮮明に保たれています。華やかさという観点から見れば決して派手ではありませんが、その静かな確実性の背後には、患者安全への深い配慮が息づいていることを実感いたしました。

三、教育と継承——

協働の中で研鑽を重ね、継承の中で受け継がれていく

日本の医療体制における臨床教育への重視に、私は大きな感銘を受け、多くを学ぶことができました。国家レベルのがん専門医療機関であるがん研有明病院においては、胃外科の研修医は単に手術に参加するだけでなく、回診、講義、MDTカンファレンスにも積極的に関与し、知識と経験の体系的継承が実践されています。

胃外科の4名の主執刀医の先生方は、ロボット手術や極めて高度で複雑な手術操作を除き、手術のほぼ全工程において第一助手を務めてられています。中でも特に強く印象に残ったのは、低出血量を徹底する手術スタイルと、手術映像を繰り返し検証する学究的姿勢によって、高強度かつ高品質な若手医師育成が実現されている点です。その結果、チーム全体の手術様式の高度な統一へと結実し、低合併症率を支える重要な基盤となっていることに深い感銘を受けました。

布部創也先生をはじめとする主執刀医の先生方は、第一助手として、超音波メスの使用方向、組織間隙の展開方法、電気メスの出力調整に至るまで、手取り足取り指導し繰り返し修正を重ねます。たとえ研修医が一時的に十分に対応できず、傍らで見守る者のほうが内心焦りを覚えるほどの場面でさえ、主執刀医の先生方は終始穏やかな表情を崩すことなく、辛抱強く指導を続けられます。その落ち着きは、十分な時間的余裕を確保した上で教育に臨むという自信の表れであるように感じました。

この経験を通じて、医療の本質は単に疾病を治癒することにとどまらず、継承によって未来へと受け継がれていく営みであるという確信を深めました。

四、医療機能分化と臨床研究志向——

臨床課題を起点とするエビデンス実践

がん研有明病院の患者の多くは紹介患者であり、80歳以上の高齢者が半数以上を占め、多疾患併存の高齢患者が多く、術前治療歴や再発を伴う進行期胃癌症例が多く、症例の複雑性という点では中国国内と大きな差はないと感じました。特筆すべきは、日本の臨床医の多くは基礎研究中心ではなく、臨床ガイドラインの改訂につながる大規模多施設共同試験に注力している点です。このような研究志向は、中国における臨床研究の方向性を再考する上で、有益な示唆を与えるものであると考えております。

五、謝辞と今後の展望

日本において長期にわたり外国人医師を受け入れる医療機関は決して多くありません。今回の研修が実現できたのは、日中医学交流センターによる言語支援、査証手続き、住居手配をはじめとする多方面にわたる全面的なご支援と、日本側医療機関との的確なマッチングのおかげです。こうした万全の体制が整えられていたからこそ、私は臨床と研究に専念することができました。

今回の研修を通じて、「標準化」「協働」「振り返り」が、経験を実践的能力へと昇華させるための必由の道であると強く認識いたしました。帰任後は、これらを日常診療の中で実践し、課題研究とフォローアップを通じて検証可能なエビデンスを積み重ねてまいります。そして、専門性と誠意をもって患者さんに還元するとともに、中国における胃外科の質の高い発展に微力ながら貢献していきたいと考えております。

国立癌症研究中心中央医院研修感想

范 遥

河北医科大学第一医院 肿瘤科

2025年10月至12月，我在日本国立癌症研究中心中央医院度过了三个月研修时光，从刚到科室时对中日医疗模式差异的惊讶，到逐渐融入其中并与带教老师讨论问题，这段在三个不同科室的学习经历让我的专业视野得到极大拓展，也让我对“精准医疗”有了更深刻的体悟。作为日本顶尖的癌症诊疗与研究机构，这里完善的多学科协作模式、精益求精的技术追求和贯穿全程的人文关怀，都成为我职业成长路上珍贵的财富，而这一切收获，离不开三个科室老师的悉心指导与无私分享。

第一个研修科室是肿瘤内科，主要的病种包括乳腺癌、妇科肿瘤、泌尿系肿瘤及肉瘤等，每天早交班，大家都会一起讨论患者的治疗方案，无论是常规治疗还是疑难病例，查看检验检查结果、进食及睡眠情况，认真负责体现在各个方面。查房时，对每一位患者耐心的问候，都体现出人文关怀。出门诊时，医生会向患者指出检查结果中的每一处变化，解释原因，提供可选的治疗方案；对于适合的患者，耐心提供临床试验的解释说明，处处表现着医生与患者之间的尊重与信任。与不同外科都有固定时间的多学科协作，在讨论中，制定更针对患者本身的治疗计划，体现“精准医疗”。除此之外，每周三早晨的文献学习与讨论，能了解前沿知识，碰撞出灵感的火花。



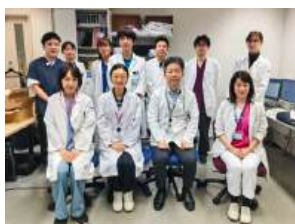
肿瘤内科 研修纪念
腫瘍内科での研修

乳腺外科 研修纪念
乳腺外科での研修

第二个研修科室是乳腺外科，我观摩了数十台乳腺癌根治手术，从保乳手术、前哨淋巴结活检到乳房重建术，每一台手术都彰显着“根治与保美并重”的治疗哲学。乳腺癌根治术后乳房重建，由乳腺外科和整形外科的医生共同操作，老师们操作时每一步都熟练又仔细，让我明白外科医生的责任不仅是切除病灶，更是守护患者的生活希望。

第三个研修科室是放射治疗科，这里拥有尖端医疗如重中子捕获治疗的临床试验，也有VMAT、SBRT、近距离放射治疗等各种治疗方式，真正做到了针对不同患者的“精准放疗”，无论是早期患者的根治治疗还是晚期患者以缓解症状为主的缓和医疗，都能通过不同治疗方式“量体裁衣”制定治疗计划。在这里，我看到各位老师对患者耐心解释放疗流程及注意事项，勾画靶区及审核计划时的细致入微，近距离放射治疗插植时的准确无误。对于放疗后患者的随访也非常到位，当我在门诊看到放疗后13年还在随访的老先生，明白了每年的见面就是医生和患者互相的“安心”。

三个月的研修时光转瞬即逝，这期间的临床知识与人文感悟让我受益匪浅。回到岗位后，我计划将在国立癌症研究中心学到的精准诊疗理念、多学科协作模式应用于临床实践，同时把人文关怀融入诊疗的每一个环节，为国内癌症患者提供更优质、更有温度的医疗服务。



放射线治疗科 研修纪念
放射線治療科での研修

国立がん研究センター中央病院研修所感

范 遥

河北医科大学第一医院 腫瘍科



2025年10月から12月にかけての3か月間、私は国立がん研究センター中央病院にて研修の機会をいただきました。研修当初は、日本と中国における医療体制の違いに驚くこともありましたが、次第に現場に溶け込み、指導医の先生方と活発に議論できるようになりました。三つの異なる診療科での研修経験は、私の専門的視野を大きく広げるとともに、「精密医療」への理解をより一層深める貴重な機会となりました。

日本を代表するがん診療・研究機関である同センターにおいて、確立された多職種・多診療科連携の体制、完成度を徹底的に高めるための技術的探究、そしてあらゆる場面において一貫して実践されている患者に寄り添う姿勢は、私の今後の医師人生において大きな財産になりました。これらの学びは、研修を受け入れていただいたそれぞれの診療科の先生方の丁寧なご指導と惜しみないご共有なくしては得られなかったものです。

最初に研修したのは腫瘍内科で、主に乳がん、婦人科がん、泌尿器系腫瘍、肉腫などを対象としていました。毎朝の申し送りの時間を通して、通常症例から難治症例に至るまで、患者一人ひとりの治療方針について活発な議論が行われ、検査結果や食事・睡眠状況に至るまで細やかに確認されていました。回診時には、すべての患者に対して丁寧な声かけが行われ、患者に寄り添う姿勢が自然に実践されていることを強く感じました。外来診療では、医師がすべて検査結果の変化について分かりやすく説明し、複数の治療選択肢を提示するとともに、適応のある患者には臨床試験についても丁寧に説明していました。そこには、医師と患者の間に築かれた深い尊重と信頼関係がありました。また、各外科との定期的な多診療科カンファレンスを通じて、患者一人ひとりに最適化された治療方針が検討されており、「精密医療」の実践を間近で学ぶことができました。さらに、毎週水曜日の朝に行われる文献抄読会では、最新の知見に触れ、議論の中から新たな発想が生まれる刺激的な時間を体験しました。

次に研修した乳腺外科では、数十例に及ぶ乳がん根治手術を見学しました。乳房温存手術、センチネルリンパ節生検、乳房再建術に至るまで、いずれの手術にも「根治性と整容性の両立」を重視する治療理念が貫かれていました。特に、乳がん根治手術後の乳房再建では、乳腺外科医と形成外科医が協働して手術を行い、各工程が的確かつ丁寧に進められていました。これらの経験を通じて、外科医の役割は病変を切除することにとどまらず、患者の生活の質や将来への希望を守ることにあると、改めて深く実感しました。

三つ目は放射線治療科でした。ここでは、ホウ素中性子捕捉療法（BNCT）の臨床試験をはじめ、VMAT、SBRT、近接照射など多様な治療法が実践されており、患者の状態に応じた「精密放射線治療」が行われていました。早期がんに対する根治治療から、進行期患者に対する症状緩和を目的とした緩和医療まで、それぞれに最適な治療計画が“オーダーメイド”で立案されている点が印象的でした。ここでは、医師が患者に対して放射線治療の流れや注意点を丁寧に説明する姿、標的輪郭の作成や治療計画の確認における細やかさ、さらに近接照射における正確無比な手技を間近で学ぶことができました。また、治療後の長期フォローアップも徹底されており、外来で放射線治療後13年を経ても定期通院されている患者を拝見した際には、毎年の診察が医師と患者双方にとっての「安心」につながっていることを実感しました。

三か月間の研修はあっという間でしたが、そこで得た臨床知識と人間的な学びは、私にとって計り知れない価値を持つものです。帰国後は、国立がん研究センターで学んだ精密診療の考え方や多診療科連携のモデルを日常診療に活かすとともに、患者に寄り添う姿勢を診療のあらゆる場面に取り入れ、中国国内のがん患者に対して、より質が高く、温かみのある医療を提供していきたいと考えています。

あしたの「笑顔」を創造する。

UT 株式会社 ミノファーマーゲノ製薬

〒160-0023 東京都新宿区西新宿3-2-11 TEL 03(5909)2323(代)



NPO法人 日中医学交流中心 Japan-China Medical Communication Center

日中医学交流中心是一所通过医学平台从事中日两国学术交流、人员交流的机构，于1991年以原日本国会议员、原日中友好协会名誉会长宇都宫德马先生、一宫胜也先生、朴顺子女士为中心成立。成立当初得到中国卫生部、中华医学会、中国驻日本大使馆的大力支持。1999年被日本内阁府认定为NPO法人（非营利组织）。2007年起，可承接中国国家外国专家局境外培训项目。

成立35年来，本中心与日本政府相关机构、各大医院、医学研究机构、医学团体等建立了良好的信赖合作关系，搭建起中日医学交流的桥梁，推动了中日两国医学事业的发展。截至2025年度，共组织邀请日本专家约360人次访问中国，接待中国医疗卫生570余相关团体，培训医疗健康领域人才万余人。此外，2020-2025年度6年间共组织线上交流·培训80场，参会人数近17万人次。通过线上线下相结合的方式，来自中国医疗卫生领域培训受益人数超过18万人次。

会中心特征:

及时把握日本医学领域的最新进展，第一时间将最新信息介绍到中国，组织中国的相关医务人员赴日培训学习。

培训方式:

- 专家授课与参观、见习、学习相结合，团体授课与分组讨论相结合等多种灵活的方式。
- 可按照委培单位的要求制定培训计划并组织实施。

服务内容:

- 对接并实施赴日研修、考察和学术交流
- 组织并实施医学领域各学科的培训、学习
- 企划推进及组织中日间各学科的医学交流国际会议
- 邀请及安排参加在日举办的各学科学术会议等

2026年度日本医学学术会议信息

时间	学术会议	地点	时间	学术会议	地点
综合			血液		
2027.04.23-25	日本医学会总会(第32回)	大阪	06.04-06	日本淋巴瘤学会学术会议(第66回)	东京
消化器			10.09-11	日本血液学会学术会议(第88回)	京都
05.08-10	日本消化内镜学会总会(第111回)	横滨	11.19-21	日本单采学会学术大会(第47回)	札幌
06.25-26	日本食道学会学术会议(第80回)	郡山	2027.03.04-06	日本造血·免疫细胞治疗学会总会(第49回)	横滨
07.15-17	日本消化外科学会学术会议(第81回)	横滨	过敏·免疫		
11.05-07	日本消化病学会大会(第68回)	神户	04.22-25	日本风湿学会总会·学术会议(第70回)	福冈
11.05-07	日本消化内镜学会总会(第112回)	神户	10.15-18	日本过敏学会学术大会(第75回)	京都
11.20-21	日本大肠肛门病学会学术会议(第81回)	长崎	10.22-24	日本临床免疫学会学术总会(第54回)	东京
肝胆胰			11.17-19	日本免疫学会学术会议(第55回)	大阪
05.22-23	日本肝胆胰外科学会·学术会议(第38回)	奈良	骨·关节·肌肉		
06.18-19	日本肝脏学会总会(第62回)	新潟	04.09-10	日本手外科学会学术会议(第69回)	福冈
心血管系统			04.16-18	日本脊柱脊髓病学会学术会议(第55回)	福冈
05.27-29	日本血管外科学会学术总会(第54回)	大阪	04.22-24	日本整形外科学会总会·学术会议(第69回)	德岛
07.04-05	日本动脉硬化化学会总会·学术会议(第58回)	东京	05.21-24	日本整形外科学会学术总会(第99回)	神户
10.10-12	日本高血压学会总会(第48回)	宇都宫	05.30-31	日本温泉气候物理医学会总会·学术会议(第91回)	安中
10.15-16	日本脉管学会学术会议(第67回)	神户	06.04-07	日本康复医学会学术会议(第63回)	福冈
10.20-22	日本胸部外科学会定期学术会议(第79回)	京都	07.02-04	日本骨代谢学会学术会议(第44回)	浦安
2027.03(预计)	日本心血管系统学会学术会议(第91回)	未定	08.21-22	日本平滑筋学会总会(第68回)	松山
2027.03.04-06	日本心脏血管外科学会学术总会(第57回)	富山	09.11-13	日本骨质疏松症学会(第28回)	新潟
代谢·内分泌			09.25-27	日本体力医学会大会(第80回)	弘前
05.21-23	日本糖尿病学会年次学术会议(第69回) 亚洲糖尿病学会学术会议AASD2026(第18回)	大阪	11.07-08	日本临床运动医学会学术会议(第37回)	轻井泽
06.02-06	日本内分泌学会学术总会JES2026(第99回)	京都	精神·神经		
10.03-04	日本肥胖学会(第47回)	宇都宫	05.20-23	日本神经学会学术大会(第67回)	横滨
10.22-24	日本甲状腺学会学术会议(第69回)	仙台	06.18-20	日本精神神经学会学术总会(第122回)	横滨
2027.03.12-13	日本糖尿病眼学会总会(第33回)	金泽	06.25-27	日本神经病理学会总会学术研究科(第67回)	新潟
呼吸系统			07.23-24	日本睡眠学会学术会议(第50回)	千叶
04.17-19	日本呼吸系统学会学术演讲会(第66回)	神户	09.26-09.27	日本心身医学会总会与学术演讲会(第67回)	福冈
05.14-15	日本呼吸系统外科学会学术会议(第43回)	筑波	10.01-03	日本癫痫学会学术会议(第59回)	新潟
06.19-20	日本结核·非结核性抗酸菌症学会学术演讲会(第101回)	冈山	10.21-23	日本脑神经外科学会学术总会(第85回)	札幌
06.25-26	日本呼吸系统内镜学会学术会议(第49回)	熊本	10.30-31	日本自主神经学会学术总会(第79回)	金泽
11.12-13	日本气管食道科学会学术总会与学术演讲会(第77回)	东京	11.12-14	日本临床神经生理学会学术大会(第56回)	米子
肾·泌尿系统			11.13-15	日本痴呆学会学术会议(第45回)	筑波
04.23-26	日本泌尿科学会总会(第113回)	京都	11.13-15	日本老年精神医学会学术会议(第41回)	筑波
06.19-21	日本透析医学会学术会议·总会(第71回)	神户	2027.03(预计)	日本脑卒中学会学术会议(第52回)	未定
10.17-18	日本肾脏学会东部学术大会(第56回)	东京	内科		
2027.06.11-13	日本肾脏学会学术总会(第70回)	神户	04.10-12	日本内科学会总会·演讲会(第123回)	东京
感染病			05.29-31	日本初级医疗联合会学术大会(第17回)	京都
04.17-19	日本卫生动物学会大会(第78回)	下野	外科		
05.22-24	日本感染症学会总会·学术演讲会(第100回)	东京	04.23-25	日本外科学会定期学术会议(第126回)	札幌
05.22-24	日本化学治疗学会总会(第74回)	东京	05.20-05.23	日本耳鼻咽喉科头颈外科学会学术会议(第127回)	仙台
06.03-05	日本汉森病学会学术会议(第99回)	御殿场	06.04-06	日本内分泌外科学会学术会议(第38回)	大阪
11.02-04	日本生物安全学会总会·学术会议(第24回)	千叶	06.11-13	日本小儿外科学会学术会议(第63回)	名古屋
11.21-22	日本医真菌学会学术会议(第回)	八王子	09.02-05	日本内镜外科学会总会(第39回)	横滨
11.27-29	日本热带医学会大会(第67回)	埼玉	肿瘤		
2027.03(预计)	日本细菌学会总会(第100回)	未定	06.25-27	日本乳癌学会学术总会(第34回)	京都
2027.03(预计)	日本寄生虫学会大会(第96回)	未定	07.17-19	日本妇科肿瘤学会学术会议(第68回)	札幌
血液			09.24-26	日本癌学会学术总会(第85回)	京都
05.14-16	日本输血·细胞治疗学会学术会议(第74回)	横滨	10.22-24	日本癌治疗学会学术会议(第64回)	神户
05.28-30	日本血栓止血学会学术会议(第48回)	小田原	11.12-14	日本小儿血液与肿瘤学会学术会议(第68回)	横滨

时间	学术会议	地点
12.03-12.05	日本肺癌学会学术会议(第67回)	神户
2027.03.18-20	日本临床肿瘤学会学术会议(第24回)	金泽
2027.03.25-27	日本胃癌学会总会(第99回)	米子
5.15-16	日本放射肿瘤学会生物部会学术大会暨放射抗癌研讨会(第63回)	岐阜
儿 科		
04.17-19	日本小儿科学会学术会议(第129回)	下关
06.03-06	日本小儿神经学会学术会议(第68回)	宇都宫
06.06-07	日本小儿科医会总会(第37回)	新潟
07.09-11	日本小儿心血管系统学会总会·学术会议(第62回)	东京
07.24-26	日本先天异常学会学术会议(第66回)	大津
妇 产 科		
05.15-17	日本妇产科学会学术演讲会(第78回)	札幌
07.12-14	日本围产期·新生儿医学会学术会议(第32回)	横滨
11.05-06	日本生殖医学会学术演讲会·总会(第71回)	秋田
11.28-29	日本女性医学学会学术会议(第41回)	轻井泽
眼 科		
04.09-12	日本眼科学会总会(第130回)	福冈
皮 肤 科 · 整 形 外 科		
04.18-19	日本临床皮肤科医会总会·临床学术大会(第42回)	广岛
05.21-22	日本烫伤学会总会·学术会议(第52回)	筑波
05.28-29	日本美容外科学会 JSAS(第114回)	东京
06.11-14	日本皮肤科学会学术会议(第125回)	京都
麻 醉 科		
05.21-23	日本麻醉科学会学术会议(第73回)	横滨
07.09-11	日本疼痛医学学会学术会议(第60回)	京都
放 射 科		
04.16-19	日本医学放射学会总会(第85回)	横滨
05.21-23	日本IVR学会总会(第55回)	熊本
10.16-18	日本磁共振医学会大会(第54回)	鹿儿岛
11.19-21	日本核医学会学术总会(第66回)	姫路
前 沿 医 学		
09.10-12	日本移植学会总会(第61回)	东京
10.03-04	日本激光医学会总会(第47回)	东京
11.03-05	日本人工脏器学会学术会议(第回)	盛冈
11.18-21	日本人类遗传学会学术会议(第回)	仙台
12.01-12.04	日本生化学会学术会议(第99回)	横滨
2027.03(预计)	日本再生医疗学会总会(第26回)	未定
急 救 医 疗		
10.27-29	日本急救医学会总会·学术会议(第54回)	长崎
2027.03.18-20	日本灾害医学会学术会议(第32回)	札幌
2027.05.12-14	日本集中治疗医学会学术会议(第54回)	京都
东 方 医 学		
06.12-14	日本东方医学会学术总会(第76回)	富山
老 年 医 学 · 护 理		
4.18	日本老年脑神经外科学会(第39回)	米子
06.11-13	日本老年医学会学术会议(第68回)	神户
临 终 关 怀		
06.19-20	日本缓和医疗学会学术大会(第31回)	福冈

时间	学术会议	地点
护 理		
06.06-07	日本高度实践护理学会学术集会(第2回)	札幌
07.10-11	日本医疗信息学会护理学术大会(第27回)	神户
08.21-22	日本护理管理学会学术集会(第30回)	东京
09.18-20	日本护理学会学术集会(第57回)	冈山
11.06-07	日本急救护理学会学术集会(第28回)	岐阜
药 学		
11.27-28	日本临床药理学学会学术总会(第47回)	福井
2027.03.16-18	日本药理学会年会(第100回)	幕张
公 共 卫 生		
05.27-30	日本产业卫生学会(第99回)	大阪
07.25-26	日本交通医学会学术会议(第80回)	仙台
10.08-09	日本农村医学会学术会议(第回)	郡山
10.29-31	日本公共卫生学会学术总会(第84回)	东京
11.14-15	日本健康学会学术总会(第91回)	宫城
12.03-12.05	日本职业·灾害医学会学术大会(第74回)	仙台
2027.02(预计)	日本疫学会学术会议(第37回)	东京
2027.03.10-12	日本卫生学会学术总会(第97回)	大阪
病 理		
04.16-18	日本病理学会总会(第115回)	札幌
医 学 检 验		
05.29-31	日本超音波医学会学术会议(第99回)	东京
06.12-14	日本临床细胞学会总会(第67回)	横滨
11.22-23	日本临床细胞学会秋期大会(第65回)	千叶
12.17-12.20	日本临床检查医学会学术会议(第73回)	千叶
医 疗 器 械		
06.04-06	日本医疗器械学会大会(第101回)	千叶
06.06-06	日本生物医学工程学会大会(第65回)	仙台
医 疗 经 营		
10.24-25	日本医疗·病院管理学会学术总会(第64回)	下野
11.12-15	日本医疗情报学会学术大会(第27回)	札幌
行 政 、 制 度		
2026.10(预计)	日本保险医学会定時总会(第122回)	未定
遗 传 学		
07.10-07.11	日本遗传学診療学会大会(第33回)	福冈
营 养 学		
05.15-17	日本营养学·粮食学会大会(第80回)	高松
2027.01.30-02.01	日本病态营养学学会年次学术会议(第30回)	京都
2027.02.13-14	日本营养学治疗学会学术会议(第42回)	横滨
生 理 学		
2027.03(预计)	日本解剖学会学术会议(第132回)	未定
2027.03.27-29	日本生理学会大会(第104回)	广岛
口 腔 科		
04.16-18	日本口腔科学会学术会议(第80回)	新潟
综 合		
06.10-12	日本法医学会学术会议(第110回)	旭川
07.31-08.02	日本医学教育学会学术大会(第58回)	富山
09.05-06	日本医史学会总会·学术大会(第127回)	横滨



HITACHI

株式会社日立高新技术 株式会社日立ハイテク

日立高新技术的医疗健康事业在提供从诊断到治疗的广泛产品线的同时，还在全球范围内提供利用数据的数字医疗等服务。作为代表性产品，包括能够实现高质量、高效率诊断的生化学与免疫分析设备，以及能够减轻患者在治疗过程中身体负担的粒子线、X射线等放射治疗系统。通过这些产品与技术，公司持续挑战支撑医疗整体优化的医疗健康创新的创生，致力于实现“与医务人员一起为患者带来笑容”以及“实现一个无需恐惧癌症的社会”。

其中，在中国的产品提供已有30年以上的历史，截至目前，生化学分析设备和检体检验自动化系统已累计交付超过10,000台（截至2026年3月）。

目前，公司在上海市设有销售与服务据点，在苏州市和大连市设有开发与制造据点，开展业务，并将继续推进在中国的业务扩大。

此外，本公司还积极推进为可持续地球环境作出贡献的相关举措。在制造据点，通过导入太阳能发电设备推进碳中和相关举措，同时开展植树活动以及阳澄湖周边的清扫活动，以提升员工的环境保护意识，并持续开展作为企业社会责任的环境保护相关实际行动。

今后，公司也将通过数字技术与创新，继续为中国临床检验与医疗的进一步发展作出贡献。

环境保护活动

日立仪器（苏州）有限公司开展地区环境保护活动：日立高新技术



日立诊断产品（上海）有限公司
/ 日立診断産品(上海)有限公司



日立仪器（苏州）有限公司
/ 日立儀器(蘇州)有限公司



日立仪器（大连）有限公司
/ 日立儀器(大連)有限公司

日立ハイテクのヘルスケア事業は診断から治療までの幅広い製品ラインナップに加え、データを活用したデジタルヘルスケア等をグローバルに提供しています。代表的なものとして、高品質・高効率な診断を可能にする生化学・免疫分析装置、患者の治療中の身体への負担を軽減する粒子線・X線などの放射線治療システムがあります。こうした製品・技術を通じて、医療全体の最適化を支えるヘルスケア・イノベーションの創生に挑戦し、「医療従事者とともに患者さんに笑顔を」「がんを恐れることのない社会の実現」をめざしています。

その中で中国への製品提供は30年以上の歴史を持ち、これまでに生化学分析装置、検体検査自動化システムは累計10,000台以上を納入しています。(26年3月現在)

現在は上海市に販売・サービス拠点を、蘇州市と大連市には開発・製造拠点を設けており、今後も中国における事業拡大を進めていきます。

また弊社では、持続可能な地球環境への貢献の一環として、製造拠点におけるカーボンニュートラルに向けた太陽光発電設備の導入のほか、植樹活動や陽澄湖周辺での清掃活動などを行っています。これらの取り組みを通じて、従業員の環境保護意識の向上を図るとともに、企業の社会的責任の環境保護に継続的に取り組んでいます。

今後も、デジタル技術とイノベーションを通じて、中国における臨床検査・医療の更なる発展に貢献していきます。

環境保護活動

日立儀器(蘇州)有限公司が、地域環境保全活動を実施：日立ハイテク

联结中日健康产业的 专业商社

着手小局 辛勤耕耘
放眼未来 不断创新
建设平台 携手共赢



*1. 医药品、医疗器械及其他健康产品的生产、销售、开发
*2. 提供CRO以及其他面向健康产业的专业服务



日本创新药研发与跨境合作平台

连接日本医药产业与全球创新Biotech企业，推动创新药物研发，加速进入日本与亚洲市场



创新药研发支持

提供IRO全流程综合支援服务，覆盖研发到上市



海外企业日本拓展

协助海外Biotech企业制定市场策略，进入日本市场



日本企业中国准入

支持日本制药企业合规注册，顺利进入中国市场

全流程支援范围

Seeds

市场调研
技术开发
研发与注册战略
合同体系
药价策略

Early Stage

早期临床(GCP)
毒理(GLP)
生产体系(GMP)
营销规划

Late Stage

后期临床(GCP)
注册申报与上市批准
PMF验证
商业化验证

创业阶段

经营战略与商业计划
资本战略规划
融资与资本结构咨询

销售阶段

销售战略
(生产·供应链·市场推广)
退出战略 (IPO·并购)

什么是 IRO 服务?

针对产品，从战略制定，研发体系构建到业务拓展，提供全流程综合支援服务



Innovative
Research
Organization

EP-Bio Partners Co., Ltd.

<https://ep-biopartners.com>

详情请见官网 ▶

